阿見町の自然ガイド 2020

～身近な自然の生きものたち～

阿見町環境審議会
阿見町 町民生活部 生活環境課

阿見町の自然ガイド　2020

～身近な自然の生きものたち～

目次（もくじ）

阿見町の自然ガイド2020

はじめに　～阿見町の身近な自然…… 4

第Ⅰ部　阿見の自然　解説と自然サイトの紹介…… 10

1．阿見の自然の仕組み…… 10

①阿見町の風景…… 10

②農業と自然…… 12

③桜並木と緑のプロムナード…… 14

④阿見町の天然記念物…… 15

2．阿見の森（ヤマ）　その保全と再生への取り組み …… 16

①ふれあいの森…… 17

②小池城址公園…… 19

③ワッカクルの森…… 20

④阿弥神社（あみじんじゃ）竹来地区 …… 22

3．阿見の谷津田（やつだ） …… 23

①うら谷津…… 26

②神田池…… 28

③レイクの森（阿見町レイクサイドタウン地区） …… 29

4．霞ヶ浦…… 31

①あゝ、霞ヶ浦の魚たち…… 31

②霞ヶ浦　湖岸の暮らし…… 34

③阿見町の漁業…… 36

④阿見町の釣り場…… 38

⑤釣り人たちの霞ヶ浦清掃活動…… 42

⑥霞ヶ浦の カモの仲間…… 45

第Ⅱ部　阿見町の生きものたち　図鑑ガイド…… 46

1．野鳥たち…… 46

人家の近くでもよく見かける鳥
耕作地や平地林などで見られる鳥
森林．山地などで見られる鳥
水辺で見られる鳥
湖上・水面上などで見られる鳥
ガン・カモの仲間
猛禽類
バードウォッチング
鳥類目録

2．魚たち…… 70

霞ヶ浦の魚／甲殻類／貝類／川の魚

3．虫たち…… 78

チョウ／トンボ／甲虫／カメムシ／ハエ／ハチ／バッタ／クモ

4．植物たち…… 90

春の花
　草原、畑地、林縁、路辺などの植物
　田んぼ、霞ヶ浦畔、河川敷などの植物
　森林内や林縁の植物
夏の花
　草原、畑地、林縁、路辺などの植物
　田んぼ、霞ヶ浦畔、河川敷などの植物
　森林内や林縁の植物
秋の花
　草原、畑地、林縁、路辺などの植物
　田んぼ、霞ヶ浦畔、河川敷などの植物
シダ植物
　草原、畑地、林縁、路辺などの植物
　田んぼ、霞ヶ浦畔、河川敷などの植物

5．動物たち…… 108

カエル／カメ／ヘビ／トカゲ／哺乳類

6．希少生物　外来生物について考える…… 113

第Ⅱ部 図鑑に掲載した「生きもの」の索引 …… 114

参考文献、執筆者、執筆協力者・編集…… 118

あとがき…… 120

はじめに

阿見町には「便利な暮らし」と「豊かな自然」がミックスした良さがあります。

町の豊かな自然の実情については、「阿見町環境保全基本計画」（第１次）に基づいて、阿見町民有志による詳しい調査研究が実施されました。このガイドブックは、その町民有志調査などを踏まえて、私たちの身近にいるたくさんの生きものたちの様子の一端を紹介したものです。

内容の中心は第Ⅱ部の図鑑ガイドです。ページ数の限界があるのでこの本で紹介出来たのは阿見の身近な生きものたちのほんの一部です。より詳しくは町民有志調査の調査報告書をご覧下さい(『阿見町の身近な自然2012』)。このブックレットでは、そのほかにコラムとして阿見町の自然にかかわるトピックスについての短い紹介や町内の自然観察サイトもいくつか紹介しました。

この本を一つの手引きとして、町民のみなさんが身近な自然と親しんでいただき、また、町外の方々にも、あみの自然について紹介いただければ幸いです。

本編に入る前に、阿見の自然の基本的条件などについて少し解説しておきます。

阿見町の自然条件の特色

阿見町の自然の特色として、まず第１に挙げられることは、穏やかな温暖な気候条件です。阿見町の気温の推移はほどほどで、適当な降水もあります。春夏秋冬、それぞれの季節にはいろいろな彩りがあります。

第２の特徴としては、日本第２の湖である霞ヶ浦の湖岸の町だということが挙げられます。霞ヶ浦は穏やかな湖で、春夏秋冬、晴れの日にも雨の日にも、それぞれの風景を見せてくれます。その向こうには関東の霊峰筑波山が遠望されます。この素晴らしい景色は阿見町の誇りですね。

第３の特徴としては、平らな地形が挙げられます。阿見町は平らな台地の街で、山がありません。霞ヶ浦の湖岸と、そこに流れ込む花室川、清明川、小野川の流域低地には、広い田んぼが拓かれています。低地の標高は海抜数メートルです。そして、その続きに平らな台地。標高20～30メートルで、畑と林が広がっています。

第４の特徴は、地域に農業が息づき、農村の土地利用が維持されていることです。つくば市に隣接する阿見町は、1980年代ころから都市的な開発が広がり、また行政による工業団地開発が進んできました。人口も急増してきました。これらの急速な開発は、結果として阿見町の自然を大きく損ねてきてしまいました。しかし、町内にはまだ元気な農業もあり、懐かしい田舎の風景も遺されています。

農業と農村景観は、町民に豊かな食と環境を提供してくれています。

阿見町の平らな台地は、大昔には浅海の底でしたが、縄文時代の終わり頃から地球が冷えてくる時代に入り、海面が低くなり、陸になったのだと推定されています。この台地は、江戸時代頃には一面のススキの原で「阿見原（あみはら）」と呼ばれていたそうです。

昔からススキの原は「ハラ」、林は「ヤマ」と呼ばれ、「ヤマ」にはアカマツが一番多かったようです。その後、ススキの原は農地や林に変わり、1970年代頃には茨城県を代表する大野菜産地となりました。その後、そこに住宅地や工業団地が広がったというのが経過のようです。現在のように、都市的な開発が進み、町の人口が急増していくのは昭和の終わり頃からでした。

伝統的な土地利用とその意味

こうした自然条件の下で、阿見町の伝統的な土地利用は、低地は田んぼ、台地では林と畑、低地と台地の境目の傾斜地は林という形が普通でした。少し前までの阿見町は、ほとんどが純農村で、農業、林業系の土地利用が支配的でした。

このガイドブックで紹介していく私たちの身近に生きる生きものたちの主な生活拠点は、かつての農村的な土地利用、すなわち農業や林業に由来して創られた田舎の自然がほとんどなのです。

いま阿見町は、都市的な開発がかなりのスピードで進んでいて、その反面では、農業的な、あるいは林業的な土地利用の後退、衰退が広がってきています。こうした変化を「自然を守る」という視点からみると、土地利用における「現代的開発」と「伝統的利用の保全」の対立、せめぎ合いという状況がとても大きな問題として浮かび上がってきます。より踏み込んで言えば、阿見町の自然の多くは、農業や林業に由来する遺された自然であり、その自然のあり方は現代的な都市的な開発によって壊されているのです。ですから自然を守るには、自然それ自体を理解し愛でていくだけでなく、併せて、地域における農業や林業の大切な意味についての理解も不可欠だと思うのです。

これらのことについてはコラム「農業と自然」の項で、少し解説させていただきます。

阿見町のたくさんの生きものたち

さて、前書きの終わりに、このガイドブックの中心である第Ⅱ部の図鑑ガイドの内容などについて少し紹介したいと思います。

阿見町の自然として、みなさんにまずお伝えしたいことは、阿見町にはたくさんの鳥たちがいるということです。

茨城県の鳥はヒバリです。ヒバリは麦畑などに棲む鳥で、「ハラ」の鳥の代表格です。阿見町の鳥はウグイスで、「ヤマ」と「ハラ」、そしてその境目にある「ヤブ」が暮らしの場です。また阿見町の「ヤマ」にはオオタカも棲んでいます。オオタカは山の鳥で、阿見町には山の自然の要素もあると言うことですね。また、霞ヶ浦にはたくさんの種類の水鳥たちが暮らしています。いろいろな渡り鳥も阿見町に飛来しています。阿見町で確認される野鳥は165種に及んでいます。

阿見町の自然として第二にお伝えしたいことは、魚たちのことです。霞ヶ浦にはワカサギ、シラウオを代表格として、たくさんの魚がいます。阿見町は釣り人たちの魅力ある釣り場となっていて、ルアー釣り、ヘラブナ釣りなども人気です。田んぼ近くの小川（水路）などにはメダカやドジョウも見られます。小川にはシジミもいます。

阿見町の自然の第三の特徴は、多種類の植物が生きているということです。町民有志調査が実施される前の段階では、阿見町に生育する植物の種類は800種ほどとされていましたが、詳しく調べてみるとなんと1200種ほどの植物が確認できています。なかには他地域ではなかなかみられない希少な植物も見つかっています。湖岸には湖岸特有の植物が、林には林の植物が、田畑には田畑の植物が生きています。それらの植物たちが四季折々の風景を作ってくれています。また、阿見町には天然記念物などに指定されている巨木もあります。

こんな自然条件のもとで、阿見町には多種類の虫たちが生きています。子どもたちが大好きな、チョウもトンボも甲虫類もいろいろいます。季節を選んで、林、田畑、湖畔の道を歩けば楽しい昆虫採集も出来ますよ。

また、いろいろな野生動物たちも生きています。ノネズミ、ノウサギもいます。ノネズミの仲間で「カヤネズミ」という愛くるしい小ネズミもいます。カヤネズミは希少生物とされています。また、田んぼの近くではいろいろなカエルが生息しています。いろいろなヘビも生きています。

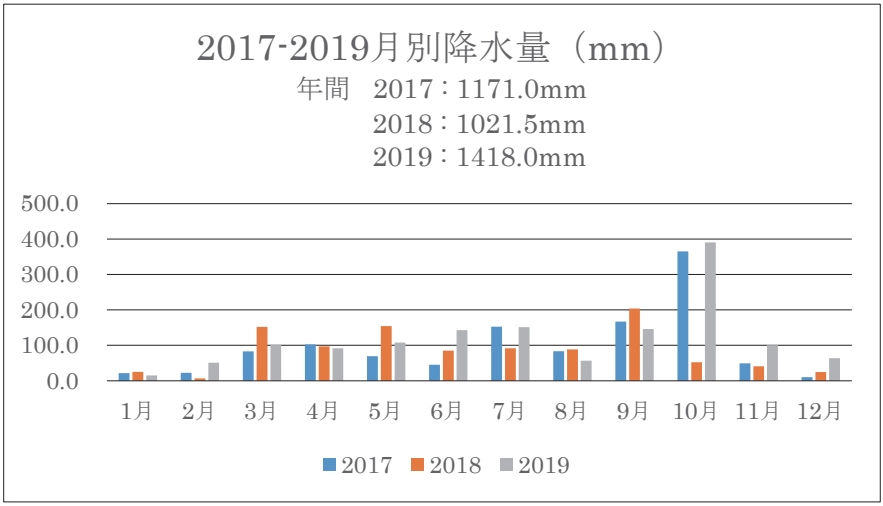
最後にお願いです。

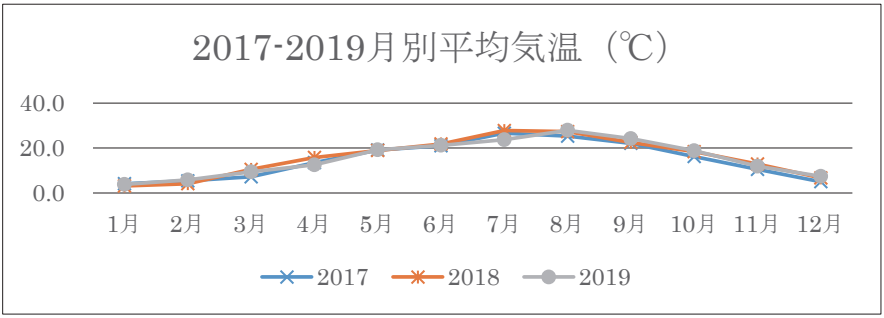
このガイドブックを利用して自然観察しながら町の小道を歩いていただきたいのですが、事故には注意して下さい。場所によってはスズメバチや毒のあるマムシなどもいます。交通事故にも注意して下さい。ゴミの持ち帰り、ゴミの回収にもご協力ください。

また、自然豊かな場所のほとんどは私有地です。地主さんへのご挨拶などのマナーへのご配慮もお願いします。

また、生きものたちにとってはその土地が一番暮らしやすい場所ですから、採取、持ち帰りは出来るだけ控えて下さい。よろしくお願いします。　（中島　紀一）

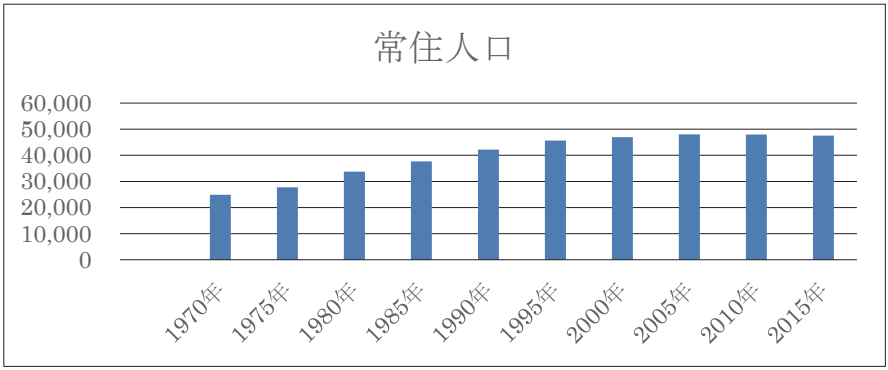
阿見町の気候表





気象庁 HP 過去の気象データ　茨城県土浦地点　より

阿見町の人口



町 HP　国勢調査　阿見町昼夜間常住人口の推移　より

阿見町マップ
JR常磐線
荒川沖駅
ひたちの牛久駅
茨城大学
阿見町役場
本郷ふれあいセンター
北西・中央部の平坦台地
うら谷津
南西部の乙戸川流域地域
牛久阿見I.C
小池城址公園
福田工業団地
牛久大仏

陸上自衛隊
武器学校
予科練平和記念館
●霞ヶ浦
●レイクの森
●阿弥神社
北東部の霞ヶ浦湖岸地域
国道125号線
●ワッカクルの森
●南高梅林（島津地区）
国道125号線バイパス
筑波南第一工業団地
（香澄の里工業団地）
●ふれあいの森
総合運動公園
阿見東部工業団地
●神田池
南東部の丘陵地域
あみプレミアム
・アウトレット
阿見東I.C
首都圏中央連絡自動車道（圏央道）

第Ⅰ部　阿見町の自然　解説と自然サイトの紹介

1．阿見の自然の仕組み

① 阿見町・昔の風景

「霞ヶ浦とその向こうには筑波山」という阿見町の風景は昔も今も変わりがありませんが、昔と今では違っているところもいろいろあります。

湖畔の風景　葦原が広く続いていた

台地の縁から湖畔を眺めると、今は、手前に稲とレンコンの田んぼが広がり、その向こうに霞ヶ浦を囲む堤防が見えます。堤防の際には少しの植物が生えているところもありますが、おおよそはすぐに湖水となっています。

湖岸の堤防建設は国の「霞ヶ浦開発事業」の重要施策として、1967年に開始され、1996年に完成しています。堤防がなかった時代には、国道125号線旧道の近くまでが霞ヶ浦の湖域で、そこから現在の堤防のあたりまでは葦原と砂浜になっていました。湖岸に広い葦原があるのは、現在では稲敷市浮島の「妙岐の鼻」だけになってしまいましたが、堤が出来るまでは、阿見町の湖畔もおおよそは葦原や砂浜でした。

湖岸堤が築かれて、湖岸の葦原や砂浜は田んぼとなりました。堤造成が始まった頃は米づくりの時代でしたが、その後、食料情勢は大きく変わり、米余りの時代になり、田んぼでは稲ではなくレンコンが多く栽培されるようになっています。

台地の風景　「ハラ」と「ヤマ」

ＪＲ荒川沖駅から阿見町役場、そしてアウトレット、さらにその先まで稲敷台地と名付けられた平坦な台地が続きます。現在の主な土地利用は住宅地、商業地、工業地、大学、病院、そして畑などとなっていますが、昔、そのあたりは「阿見原」と総称され、ススキの草原や湿地が広がっていました。見渡す限りどこまでも続いていた「ハラ（原）」には人家はほとんどなかったと伝えられています。

昔の家はほとんどが草屋根でした。阿見原のススキは家々の屋根葺きの主材料として大切に使われました。周辺の村々の草刈り場は決まっていて、毎年、

冬の頃には村人たちの共同作業でススキが刈り取られ、家々の屋根はやはり共同作業で順々に葺き替えられていきました。ハラではススキ刈りのあと火入れがされました。火入れをして野焼きをするとススキは揃って芽生えてきます。

ススキの別名はカヤで、「茅」や「萱」の字があてられます。「萱」にはススキだけでなく霞ヶ浦湖岸のアシ（葦）も含まれ、ともに草屋根の材料として使われてきました。

平らな台地にはススキの原だけでなく森もありました。阿見町の森には「平地林」と谷津田を囲む「谷津の森」の２種があります。この本の「はじめに」にも書きましたが、森のことを地元では「ヤマ」と呼んできました。「ヤマ」は山菜、キノコ、木の実、薬草などの宝庫でした。また、石油、ガスが便利に使われるようになる前の時代の主な燃料＝薪の採取場でもありました。

埼玉県の武蔵野も阿見町と似た台地地形の場所で、雑木林（クヌギ、ナラ、クリ、エゴノキなどの林）がよく知られています。武蔵野の雑木は伐られて薪となり、江戸・東京の燃料を支えていました。阿見町の森の木は主に松（アカマツ）で、これも薪として江戸・東京に出荷されました。松の薪は火力が強く、工業燃料として歓迎されたようです。薪は重くて輸送がたいへんでしたが、田んぼの脇の小さな水路から舟に積まれて、霞ヶ浦→利根川→江戸川というルートで江戸・東京に運ばれたようです。

また、「ヤマ」は畑に入れる堆肥材料を採る場所でもありました。堆肥材料としては落葉広葉樹の落葉がまず頭に浮かびますが、マツの落葉も素晴らしい堆肥の材料でした。阿見町の畑でも広く栽培されていたタバコの苗づくりのための床土（腐葉土）にはマツの落葉堆肥が最適でした。そんなヤマのマツは1990年頃にはマツクイムシで一斉に枯死し、いまではマツのヤマはほとんどなくなってしまいました。

時代の変化の中でハラやヤマの利用は衰退し、畑や田んぼに代わっていきました。次の「農業と自然」のコラムでも紹介しますが、拓かれた畑ではハクサイ、ネギ、スイカなどの野菜が作られ、1980年代には阿見町は茨城県を代表する野菜産地となりました。また、阿見原には排水の悪い湿地も多く、そうした土地条件も活かして、霞ヶ浦から水を揚げたり、井戸を掘ったりして、田んぼにもなりました。こうしたハラでの田んぼは陸田（りくでん）と呼ばれていました。

（中島　紀一）

② 農業と自然

「はじめに」にも書いたように、阿見の自然は霞ヶ浦の存在と農業・農村の土地利用が基本となっています。霞ヶ浦の自然も、水草・藻（モク）の採取などの形で農業を支えてくれました。

町が公表している2015年の統計データによれば、町の総面積のうち、農地は26%、林地は15%、農林地が計41%を占めています。農地の内訳は、田んぼが40%、畑が60%。しかし、農地も林地も減少をつづけています。最近では、太陽光発電の用地として森の伐採がかなりのスピードで進んできたことが特に心配です。しかし、それでもまだ町面積の半分近くは農林地で占められています。農林地の利用や管理のあり方にもいろいろ問題はありますが、農林地は、一応は、自然に近い土地、たくさんの生きものたちが生きる場と考えて良いでしょう。

阿見町の自然を守り豊かにしていくためには、まずは林地（ヤマ）の面積を減らさないこと、そして農地の面積も維持していくこと、農業利用が難しくなった農地は林地に戻していくこと、などが課題として大切だと思います。

春先の土塵嵐をなんとかしたい　畑には麦を育てよう

阿見の町民にとって、農業・農地に関して困ることの一つは春の土塵嵐ですね。阿見町では、冬季はよく晴れて強い西風が吹きます。台地の畑は火山灰土壌で、軽くて、乾くと風に飛ばされやすいという性質があります。

春先の土塵嵐、それによる風蝕は、阿見町の畑作が昔から抱えてきた大きな問題でした。伝統的な対策は、お茶の垣根で畑のぐるりを囲う、秋にはかならず麦を播いて、冬から春にかけて畑を裸地にせず、麦を育てるということでした。測定してみるとこれらの対策の効果はかなりあるようです。町役場では土塵嵐防止のために麦の種の配布をしています。「冬には畑に麦が育つ」という取り組みを町民運動として広げたいですね。

野菜産地としての阿見町

東京・首都圏は野菜の大消費地です。東京都民は膨大な量の野菜を食べます。その野菜は、まず低地の江東地区、台地の練馬、世田谷、多摩地区などで生産されてきました。さらに東京の人口が増えて、足りなくなった野菜は神奈川、埼玉、千葉などが産地となって供給されるようになりました。茨城県の野菜の産地化はそれより少し遅れて1980年代頃からのことでした。

現在では茨城県は首都圏の最大の野菜産地になっていますが、阿見町はその最初の産地の一つでした。

その頃の阿見の畑の主作物は、夏にはスイカ、秋冬にはハクサイやネギでした。その後、茨城県の野菜産地は、鹿行地区（鉾田市など）、県央地区（茨城町など）に移動し、阿見町は野菜産地から都市的開発へと町の姿を変えていきました。

しかし、阿見町ではその後も元気な農家が頑張っていて、多彩な農業に取り組んでいます。なかでも地元の消費者と直接結びついた産直のチャレンジが盛んです。それに取り組む農家では、環境負荷も心配される農薬や化学肥料の使用を削減した特別栽培なども進められています。

安全で美味しい野菜のためには土づくりが大切で、有機質肥料についてのいろいろな工夫もされています。土づくりについては、できればヤマの落葉を集めた堆肥作りへの再チャレンジも期待したいところです。落葉集めには、ヤマの自然を若返らせ、豊かにしていく効果もあります。ヤマと畑の繋がりを取り戻すことも阿見町の自然を守るための大きな課題となっています。

耕作放棄地の広がりと谷津田の保全

阿見の自然にとって大事な農地や林地を所有し管理しているのは昔からこの地で暮らしてきた農家のみなさんです。しかし、農家の数は減って、田畑で働く方々の数も減り、高齢化が進んでいます。「販売農家」と分類される農家の数は、2015年には500戸ほどで、10年前の66%に大減少しています。

それでも農家のみなさんは頑張っています。しかし、どうしても手が足りず、農地の放棄（耕作放棄）がかなり目立ってきています。機械化が難しい谷津田の耕作放棄は特に深刻です。「谷津田」（やつだ）については別のコラムで詳しく紹介していますが、阿見の自然の心臓部になっています。谷津田、なかでも大切な意味のあるその源流域、それを取り囲む谷津の森の保全は自然を愛する町民たちにとって共通した大きな課題となっています。

（中島　紀一）

耕作放棄地を活用した南高梅林（島津地内）

③ 桜並木と緑のプロムナード

阿見町のほぼ中心部には緑が溢れる茨城大学阿見キャンパスが広がっています。阿見キャンパスは終戦後、霞ヶ浦海軍航空隊の広大な土地の一部に旧制大学が設置され、現在は茨城大学農学部として茨城の立地をいかした特色ある農学の教育と研究が展開されています。

阿見キャンパスの敷地を南北に通る道路は、阿見町を象徴する平和のモニュメントが建ち、街路樹の桜並木の春の風情は、「住んでよかった町」にふさわしいメインストリートとなっています。通りは県道竜ヶ崎阿見線の中の新町中郷線で、阿見坂下から中郷歩道橋までの距離は1.511メートルあります。毎年、桜の開花時期になると美しい「桜のトンネル」を楽しむことができます。

阿見キャンパスの西側に位置する茨城大農学部附属国際フィールド農学センター内には、地域の人たちに自然を楽しんでもらう目的で約550メートルの遊歩道が整備されていいます。遊歩道の両脇には、国内や海外から集められた約40種73本の桜の木が植えられており、毎年３月中旬ごろから４月中旬ごろにかけて、鮮やかに咲き誇り、様々な桜を楽しむことができます。

茨城大学農学部では、「農学部プロムナード」として、農学部構内、及び国際フィールド農学センター前遊歩道などを整備しています。このプロムナードに植えられている桜の樹木について、「さくらマップ」として地域の皆様にご覧いただけるよう解説資料を公開しています。

（小松崎　将一）

④ 阿見町の天然記念物

阿見町では、学術上価値の高い貴重な財産として、下記の天然記念物が管理保護されていますが、町民みんなで守っていきたいものです。

茨城県指定

●曙のグミ　ナツグミ（グミ科）

阿見町には、ナツグミが多いのですが、本樹は、樹高10ｍ幹周236cmと、特別大きいものです。葉丸く、夏に実る実も大きく、食べられます。樹勢も元気です。道祖神と馬頭観世音も祀られています。昭和52年7月指定

阿見町指定

●曙塙不動尊のタブノキ　タブノキ（クスノキ科）

塙不動尊のご神木で、幹周470cm 樹高13.5ｍの巨木です。樹幹空洞ですが、回りは元気です。スダジイと並んで、関東地方平地の本来植生です。昭和50年5月指定

●鹿島神社（吉原）のやどり木

ご神木のスギの樹洞にスダジイが根付いています。その後、根が伸びて栄養は土から摂っており、寄生はしていません。スギは幹周545cm 樹高35ｍあり、スダジイの樹高は10ｍあります。昭和54年11月指定

●宇都木家（吉原）の椎　スダジイ（ブナ科）

幹周600cm 樹高16ｍ樹齢500年の巨木です。個人の所有ですが、塀の外にあり、自由に見学でき、ます。裏側に空洞がありますが、樹勢は元気です。どんぐりの1種である実は食べられます。タブノキとともに本来植生です。昭和54年11月指定

●竹来阿弥神社樹叢

茨城県指定緑地環境保全地域にもなっています。
昭和52年3月指定
詳細は、阿弥神社（22ページ）を参照ください。

（稲川　雅信）

2. 阿見町の森（ヤマ）　その保全と再生への取り組み

阿見町では昔から森や林のことを「ヤマ」と呼んできました。阿見町のヤマは、大まかには平坦な台地と台地から低地に移る傾斜地の二つの場所に立地しています。

かつての阿見町のヤマの樹種は、マツ林が代表格でした。それがマツクイムシの被害でほぼ全滅して、それを機にかつてのマツ林は手入れがされない荒廃地になってきています。

マツ林が健在だった頃、もう一つの代表的なヤマはナラ、クヌギなどの雑木林でした。その頃、ヤマは農家にとって結構な収入が得られる場でした。ヤマは、材木生産というより薪生産の場で、薪は東京などに出荷されていました。雑木ヤマは落葉を使った堆肥作りや農業用牛馬の餌の草刈り場としても利用され、キノコや山菜の宝庫でもありました。しかし、そうした時代も終わりました。

第二次大戦後の時代には、建築用材木の景気が良くなり、スギやヒノキの植林地も増えました。その後、材木価格は下落して不採算となり、スギ、ヒノキ林の多くも放置されてしまっています。

自然には人の手が加えられていない「原生的自然」と人の適切な利用と手入れを前提として作られてきた「二次的自然」の２種があるとされています。阿見町のヤマは基本的に「二次的自然」です。「二次的自然」が成り立つ前提にはヤマの適切な伐採と林床管理が必要でした。

かつて阿見町のヤマはほぼ例外なくよく手入れされた明るい森でした。ヤマの景色としては初夏の新緑と秋の紅葉がよく知られていますが、それだけでなく、新緑に至る前のホワイトグリーンをベースとした「芽吹き」と冬の頃の落葉した森の「明るい陽射し」もヤマの素晴らしい魅力です。ヤマの魅力回復のためには、材木の利用と草刈りなどの林床管理が不可欠です。そのための町民ボランティアの活動も各地で進んでいます。この章では、そんな事例をいくつか紹介したいと思います。

（中島　紀一）

① ふれあいの森

若栗総合運動公園西側にひろがる森がふれあいの森です。北側の駐車場から果樹園が始まります。ビワ、ヤマモモ、キウイ、イチジクなどが植えられています。イチジクは幹が穴だらけ、これは果樹の害虫キボシカミキリの仕業です。その先を行くと葉がハート形をしたカツラ（桂）の木があります。春の新緑も美しいのですが、秋は枯葉が甘く香ります。葉が一生を終える時に香りを漂わすなんて素敵ですね。是非その香りを楽しんでください。

いよいよクヌギ、コナラを主とした広葉樹とスギや、ヒノキなどの針葉樹が混在した森が始まります。クヌギやコナラの木々の根元が不自然で歪な形をしています。クヌギやコナラは幹が切られても、また芽を出し成長する性質（萌芽更新）があるためで、過去に何度か伐採されてきたことが分かります。

ふれあいの森は春の新緑の頃が見事です。広葉樹の緑、白い花はコブシそして薄桃色のヤマザクラの花で彩られます。林床はタチツボスミレ、白花のマルバスミレ、ジュウニヒトエ、黄色花のキジムシロなどの春植物が満開です。白い小花を房状に咲かせるウワミズザクラが咲くとハナアブやクマバチがせわしく蜜を求めて飛び回ります。その背中や脚に花粉が付いているのが観察できます。サトイモ科のウラシマソウやマムシグサはハエやアブをおびき寄せるために不思議な花を咲かせます。

マメ科のクララや、チダケサシが咲きだす頃、運が良ければ木々の間を飛ぶウラナミアカシジミに会えるかもしれません。

ホトトギスが鳴き始めると夏です。アオスジアゲハ、キタテハ、ルリタテハ、ツマグロヒョウモンなどのチョウが蜜を吸いに花を訪れます。ヤマユリの花が甘く香り、ニイニイゼミ、アブラゼミ、などの鳴く声で、森は賑やかになります。カブトムシやクワガタも見つかるでしょう。

ヒガンバナ科の朱色したキツネノカミソリが咲く８月末になると、サクラが落葉し始めます。桃色花のイヌタデやキツネノマゴが群れて咲いています。芝生広場やバーベキュー場は日当たりが良く、イネ科のチカラシバ、メヒシバ、オヒシバなどが群生しています。歩く足元からトノサマバッタやオンブバッタが勢いよ

く飛び跳ねるので驚かされます。

花が少なくなる頃は、林床に多種のキノコが現れてその様々な色や形が楽しめます。木の実にも目を向けてほしいです。園内に多く見られるコブシの木の実（形が拳に似ているのが名の由来）が割れて赤い実が顔をだし「食べて」と鳥にアピールしているのが観られます。サワフタギの青色、ガマズミの赤色の実も華やかできれいです。いずれも鳥たちの好物です。

森にドングリや落ち葉が散り、再び林内は明るくなります。葉を落とした木々の枝先は、すでに次の春の準備ができています。そして森は静かに冬になります。

四季を通して森に行くと木々の変化、草花の可愛らしさ、鳥の気配なども感じられます。天敵の多い虫たちの生き残り作戦も観察できるでしょう。

ウワミズザクラ

マムシグサ

ふれあいの森は私たちが身近に自然に触れ合えるみんなの公園です。花がきれいだからと採らないでください。次に来る人が楽しめるように、花粉や蜜の好きな虫たちのためにも。是非マナーを守って楽しんでください。

（大森　はるみ）

キツネノカミソリ

アオスジアゲハ

② 小池城址公園

下小池城跡看板

乙戸川流域に沿う台地上に広がる福田工業団地の外れに下小池城跡があり、本丸跡や土塁等が残っています。「三の廓」のあった所が小池城址公園です。公園の北西の隅に駐車場があります。

平成11年に史跡と里山の復活を目的として阿見町、いばらき森林クラブおよび茨城県の3者間で締結した小池城址公園森林整備協定に基づき、荒廃していた4ヘクタールの平地林の整備が開始されました。当初の協定期間5年では目標を達成できず、その後もいばらき森林クラブが中心となり小池城址公園里山の会および地域住民と共に整備を続けてきました。

その結果、徐々に人々が楽しめる自然が戻ってきましたが、この間、特に東側の斜面一帯に繁茂し人の侵入を妨げてきたマダケ林の整備には多大の時間と労力が費やされました。その頃、同じ東側斜面に湧水が発見され、この湧水を利用して沢と池が作られ、水生生物や湿地性植物の観察ができるようになりました。こうした比較的初期の活動は樹木の間伐、下草刈り、植樹等が主でしたが、一段落した平成19年からは、遊歩道の整備が始まりました。間伐材の幹を遊歩道の脇に並べて区切りとし、枝や枯損木をチップにして遊歩道に敷きつめることにより歩きやすくなり、また草刈り作業が軽減できました。

さらに間伐材を利用したシイタケの原木栽培、落ち葉さらいと堆肥作りもなされてきました。この堆肥は、周りのコナラ、クヌギと相まってカブトムシやクワガタムシを発生させ、子どもたちを喜ばせる場ともなってきました。また、近隣のお宅から提供される孟宗竹をドラム缶窯で焼く炭焼きも続けられています。

以上のような長年にわたる関係者の努力により、荒れた平地林の藪や下草が刈り取られ、多種の野草が育つ自然が甦ってきました。今後とも多くの方々に小池城址公園の歴史と自然に触れ、親しんで貰えるよう保全活動を続けたいと思います。

（青木　成夫）

③ ワッカクルの森

その名前の由来

「ワッカクル里山の森」は阿見町の「若栗」にある手作りの里山公園です。「ワッカクル」の名前は地名にちなんで命名されました。ここには縄文の頃から人びとが暮らしていて場所で「ワッカクル」という地名はその頃からのものとされています。アイヌ語では「ワッカクル」は「水が豊かに湧き出す地」を意味しているそうです。

かつてはよく手入れされてきた里山でしたが、利用が途絶えてからは、放置され、昼なお暗く、人も入れない「ゴミ捨て場」のような状態でした。2002年に「阿見・里山ワンダーランドの会」が結成され、地域の有志と地主が協力して、ゴミ集め、藪刈り、倒木の整理などに取り組み、地域の里山公園として再生しました。ここは私有地ですが、森の生きもの、自然と風景に親しみ、地域コミュティに役立つことを願って、地域のみなさんに開放されています。

生きものたち

ワッカクル里山はマツ、スギ、ヒノキなどの植林された林にカシやエノキなどの自生した木々が混じった「混交林」です。イイキリ、コナラ、グミなど巨樹もあります。多彩な樹種の里山なので野鳥やセミなどが多く、森林浴も楽しめます。脇には小川が流れ、清明川・霞ヶ浦につながり、メダカ、ヤマベなどの小魚やシジミなども生息し、カワセミがよく見られます。近年ではモミジなどを植林し、秋には美しい紅葉も見ることができます。

「プレーパーク」

2015年6月に「親子自然体験クラブ　森のきのこ」が中心となり「ワッカクル里山の森」で「プレーパーク作り」が始まりました。「プレーパーク」とは、「自分の責任で自由に遊ぶ」を基本理念とした遊び場のことで「冒険遊び場」とも呼ばれ、豊かな自然の中で、大人が見守りながら、穴を掘ったり、木に登ったり、

火を使ったりするなど、子どもがやりたいことにチャレンジします。

「ワッカクル里山の森」では「地域のみんなで子どもを育てる場」「大人も子どもも、ともに学び、ともに育つ場」をテーマに、未就学児から小学生親子20人程で、毎月、いろいろな活動をしています。自然木を利用したブランコやシートハンモックで遊んだり、たき火をして豚汁やミネストローネ、焼き芋などを作って食べたり、参加者みんなで楽しんでいます。親にとっては生活の場とは違う出会いがあり、息抜きにもなります。遊べる森や小川を求めて、近隣市町村からもたくさんの参加者が来場するようになりました。また、子どもを連れて遊びに来るお父さん達の姿も増えました。

「ワッカクル里山」の小さな森に入ると森の空気と精気に包まれ、遊歩道を通り抜けると、市街地の近くとは思えない静かな田園風景が目に入ってきます。自分で「責任」を持って「自由」に遊び、里山の自然に親しみ、生命を大切にする「里山プレーパーク」にしていきたいです。みなさまのご参加をお待ちしています。

（栗原　友香・佐藤　征男）

④ 阿弥神社（あみじんじゃ）　竹来地区

かつての阿見町の森（ヤマ）はよく利用管理されてきたので、30～60年くらいのサイクルで定期的に更新（伐採）される比較的若い森でした。それに対して長く更新（伐採）されず長い時間を生き続けている森は、神社やお寺の境内などに残されています。寺社林、いわゆる「鎮守の森」ですね。

竹来中学校の近くにある阿弥神社（あみじんじゃ）はそんな森に囲まれています。創建が飛鳥時代とされる古い神社です。現在の本殿は江戸時代中期に建て替えられたとのことです。境内には、地元出身の江戸時代後期の俳人、吉田麦翠（よしだばくすい）の句碑「湖の風も通うて夏木立」もあります。

神社を囲むようにスギの大木を中心とした鎮守の森があり、鳥居を潜ると豊かな森の姿を見ることができます。木々の中を拝殿へと続く参道がまっすぐ伸び、参道からはまた幾筋かの小道が分岐しています。スギ巨木の樹齢は300年以上と推定されています。スギやヒノキなどの針葉樹の他にもスダジイ・シラカシなどの常緑広葉樹、コナラ･ヤマザクラなどの落葉広葉樹が混生しています。コジュケイ・ヒバリ・セグロセキレイなどの鳥たち、アオスジアゲハ・アカタテハなどのチョウたちも見ることができます。

古くから残る貴重な植生は非常に価値が高く、茨城県緑地環境保全地域に指定されています。また、「阿弥神社樹叢（あみじんじゃじゅそう）」として町指定天然記念物にも指定されています。

（阿見町　生涯学習課）

3. 阿見の谷津田（やつだ）

「谷津田」は、茨城県や千葉県の台地にある小さな谷状の地形「谷津」に人がつくった田んぼのことです。霞ヶ浦の流域にある阿見町も、たくさんの谷津田が広がっている地域の一つです。一本の谷津田から流れ出た小川は、他のたくさんの谷津田の小川と合流して、やがて大きな川になり、霞ヶ浦に注ぎ込みます。昔から阿見町に暮らす人々は、谷津田を農村の暮らしの中心として、大切に守り伝えてきました。

谷津田の自然の大きな特徴は、田んぼの周りに広い森があることです。森はため池のように、たくさんの水を溜め込むことができます。森が溜め込んだ水は、少しずつ田んぼの近くに湧き出ます。農家は小さな水路を掘り、森から湧き出る水を集めて、田んぼに引き込み、用水として使っています。谷津田は、周りに広大な森が広がっていることで成り立っています。

谷津田は、田んぼと森がつながっていることで、阿見町の中でも特にたくさんの種類の生き物がすむ場所になっています。田んぼや用水路は、たくさんの命をはぐくむ水辺です。オタマジャクシやヤゴが育ち、やがてカエルやトンボになります。田んぼの周りには草原も広がり、バッタなどの昆虫類が暮らす場所になっています。こうした田んぼの周りで育つ生き物を狙って、森にはオオタカやサシバなどの希少な猛禽類も暮らしています。水辺と森と草地、さまざまな自然環境が入り組むように接していることで、豊かな自然環境を生み出しています。

田んぼや森、草地が連なる阿見町の谷津田

このように、谷津田は阿見町をはじめとする霞ヶ浦流域の自然を形作るたいへん重要な場所です。谷津田の豊かな自然と、たくさんの生き物をはぐくむ仕組みを紹介します。

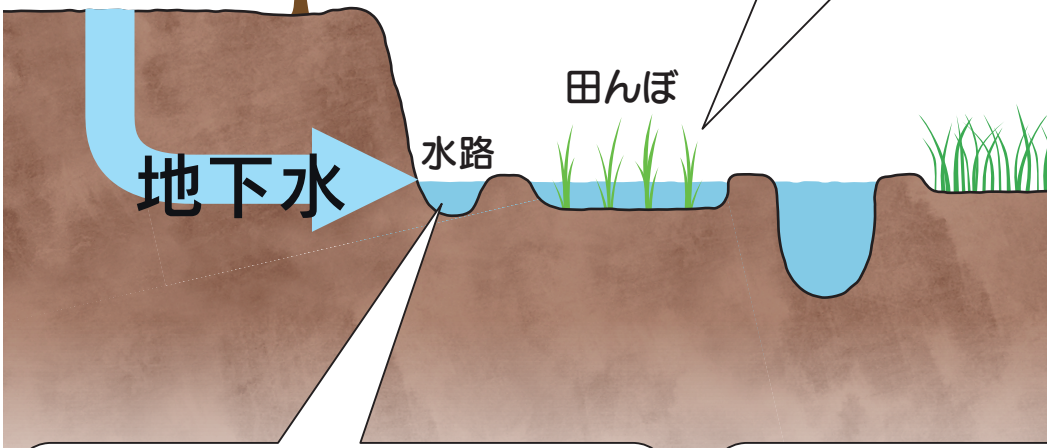
（山田　晃太郎）

田んぼ＝水辺で暮らす生き物

うら谷津の田んぼの1年

- ○4月上旬＝種まき
- ○6月中旬＝田植え
- ○9月上旬＝赤米の出穂
- ○10月中旬～＝稲刈り

写真上：トウキョウダルマガエル
写真右：赤米の出穂



しぼり水

森に降った雨は地下水になります。地下水は湧き水になって出てくるので、これを小さな水路を掘って集めて、田んぼの水に使います。阿見町ではこの湧き水を「しぼりみず」と呼びます。

写真：しぼり水が流れるうら谷津の水路

耕さなくなった田んぼ

冬を越して何年も生きる、「多年生植物」の草原になっていきます。

図１：谷津田の断面図

写真：花が満開になったセイタカ
アワダチソウの群落（10月）

① うら谷津

谷津田から流れ出す小川は、合流して河川となり、霞ヶ浦に注ぎます。町内を流れる花室川、清明川、桂川、乙戸川はいずれも谷津田の小川が集まってできる川です。

阿見町には172本の谷津頭（谷津田の先端部分）があり、周辺の市町村と合わせて、たくさんの谷津田が広がっています（図２）。さらに谷津田の水源として、谷津の最上流部にため池が作られた場所も、阿見町には４カ所あります。

周囲を森に囲まれた谷津田は、田んぼ、ため池、草地、森が隣り合わせに広がり、豊かな里地・里山の自然をつくっています。

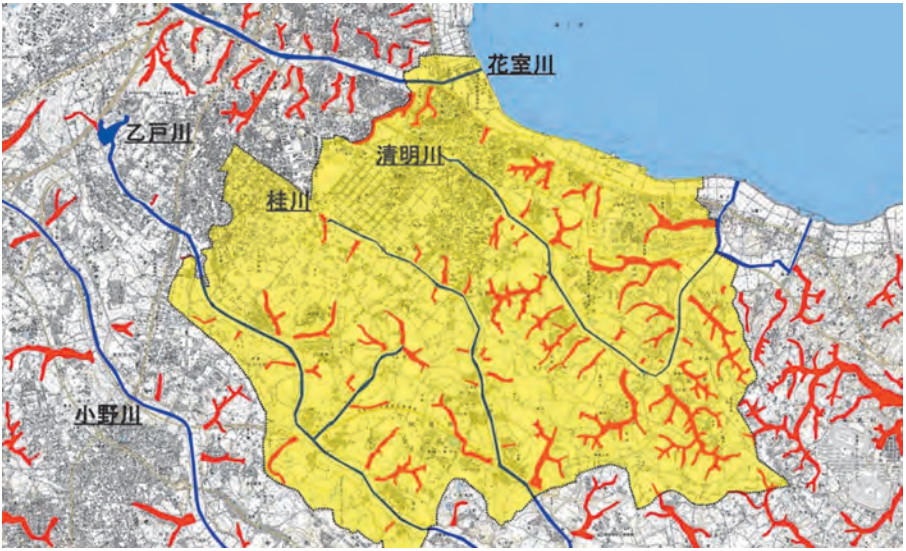


図２：赤色部分が谷津田。黄色い部分が阿見町を示しています。

阿見町上長地区にある谷津田「うら谷津」は５ヘクタールほどの田んぼと、その周りに約30ヘクタールの森が広がる自然豊かな場所です。田んぼは耕作放棄が進んでいましたが、2004年２月に谷津田の再生を目指す取り組み「うら谷津再生プロジェクト」が始まりました。地域住民や茨城大学農学部の学生が参加する他、地元の小学生が授業の一環として田んぼづくりを行っています。

田んぼや水路には、ドジョウなどの小魚や、ゲンゴロウ類などの水生昆虫が数多く見られます。また６～７月にはノカンゾウが見頃を迎え、田んぼの周りに鮮やかなオレンジ色の花を咲かせます。周囲の森はスギやヒノキなどの針葉樹が多く、一部に雑木林があります。森の周囲ではルリビタキなどの渡り鳥も観察できます。

（山田　晃太郎）

うら谷津の田植えの様子

森の近くで見られるルリビタキ

田んぼの周りに咲く
ノカンゾウの群落

うら谷津観察会

② 神田池

阿見町飯倉地区にあるため池「神田池」は、下流に広がる谷津田の水源として、江戸時代に築かれたと伝わっています。面積は約2.3ヘクタールあります。2010年に農水省のため池百選に認定され、また阿見町名所百選にも選ばれるなど、茨城県を代表するため池の１つです。

ため池とその周りに豊かな自然がある神田池

神田池の自然環境は、長く地域住民が守り続けてきました。2000年には「神田池を保全する会」が発足し、活動を続けています。

会の目的は、阿見町で最も豊かな自然を残す神田池の保全を図り、併せて阿見町の自然環境の保全に寄与することであり、活動方針は次の３項目です。

神田池が水源になっている下流域の谷津田

（１）神田池の水量と水質の確保および動植物を保護する活動
（２）神田池の周辺環境を整備するための活動
（３）地域、行政と共に阿見町の自然環境保全に関する学習、研究および啓発

会の活動は2020年で20年目となりました。最初の５年は保全整備活動でしたが、その後は、併せて子どもたちの心を豊かにはぐくむためにも、「生きる力」を育てるためにもこの豊かな地とその周辺林を、自然観察の場、自然体験の場として活用しています。

（荻島　光明・山田　晃太郎）

③ レイクの森（阿見町レイクサイドタウン地区）

レイクサイドタウン地区は阿見町の北側、稲敷台地の北端、霞ヶ浦湖畔にあります。標高25メートルの台地にあった大室城遺跡の近くの森と谷津田を平成元年頃に宅地開発して出来た住宅団地です。

団地の南側の森林は、団地ができて約30年経ち、益々荒廃、隣接道路は日中も暗く地域住民の悩みの種でした。

平成27年３月、県の「身近なみどり整備推進事業」により、道路に沿って約120メートル、道端より約20メートル奥まで約3,000平方メートルで巨木の伐採が行われました。その結果、里山や隣接道路は明るくなり、防犯上も、安全性が向上し、倒木などの危険性も解消され、また伐採エリアから、霞ヶ浦を望むことが出来るようになりました。

もともとこの場所は、昔の地名「山王谷津」が物語るとおり、谷津頭があり、台地から水が湧きだし、田んぼがあり、夏にはホタルが飛び交っていた場所でしたが、近年、ごみの不法投棄があったり荒れ放題となっていました。

地区住民の間に、この環境、景観を維持保全しようという気運がもりあがり、地区会と森林所有者との間で、森林ボランティア活動協定書を交わし、地域住民たちで整備することになりました。

レイクの森はＳ字の緩い下り坂に沿い（この下り坂は「ホタル坂」といいます）、道を挟み反対側は当団地が広がっています。この坂の先は霞ヶ浦に通じ、湖から心地よい風がながれてきます。水辺のエリアには、ミズバショウ、菖蒲、クレソンなどの水生植物、その上は、４つのゾーンに分け四季折々の草花、香りの樹木を植えるとともに、ゾーン内に散策路を作り、最上段には、「いこいの場、集いの場」を作りました（※①）。

レイクの森にはカブト虫、ホタル、赤トンボなど、多くの昆虫類が棲んでおり、水辺のエリアでは、ソーラー発電で水を循環させ、ホタルの生息環境、ビオトープ（※②）を整備しています。夏には、ホタル観察ができるようになりました。

※①環境省主催、第10回「みどり香るまちづくり」企画コンテストに「香りとホタルの森」プロジェクト～風のみち・霞風香るホタルの坂～が入賞しました。

※②ホタルのビオトープ

ビオトープとは、ドイツ語で生き物（Bio）がありのままに生息する場所（Top）を意味する合成語です。開発の反省から、自然が自ら再生できるように配慮する活動です。

（村木　貞之）

整備前のレイクの森

整備活動の様子

整備後のレイクの森

水辺のエリアとレイクの森

レイクの森からのしぼり水

4. 霞ヶ浦

① あゝ、霞ヶ浦の魚たち

茨城県の古い書物「常陸国風土記」には、霞ヶ浦には鯨以外の多くの魚がいた…と記されているそうです。また、湖岸を散策すると、アカニシガイやツメタガイ、アカガイなどの貝殻を拾うことが出来ます。これらの貝殻の多くが化石です。この様なことからもその昔の霞ヶ浦は、海であったことが伺い知れます。

そんな霞ヶ浦が淡水化されたのは、今から400年以上前に行われた利根川の東遷でしょう。これにより霞ヶ浦の河口部に土砂が溜まり、霞ヶ浦の淡水化が急速化しました。

海の魚が多く生息していた霞ヶ浦でしたが、毎年のように襲来する台風が起こす洪水を防ぎ、淡水の確保と言う命題のために常陸川水門が設置されました。これにより霞ヶ浦の淡水化は一気に加速し、フナやコイで有名な湖に変貌したのです。

霞ヶ浦で有名な魚に、ワカサギとシラウオがいます。どちらも美味しい魚ですが、年魚と呼ばれる一年の寿命です。1月から3月の時期に産卵します。先に孵化して稚魚になったものが優先的に餌を捕食できるので、年によってワカサギが豊漁だったり、シラウオだったりの現象が見られるのもこのためです。

霞ヶ浦には余所から来た魚も沢山います。1922年（大正11年）には、ヒガイと言う魚が琵琶湖から移植されました。これは明治天皇が好んで食したことから、魚へんに皇と言う字を書きます。1930年（昭和5年）頃には、再び琵琶湖からゲンゴロウブナが移植されました。また、タモロコやワタカ、ハス、カネヒラなどの魚たちも同時に移植されたのです。

外国から来た魚もいます。1943年（昭和18年）頃から戦時中の食糧確保の理由で中国から四大家魚と呼ばれるソウギョ、アオウオ、コクレン、ハクレンが移植されました。コクレンの姿は殆ど見ることが出来ませんが、その他の魚は現在も霞ヶ浦に棲息しています。この時に一緒に運ばれたのがタイリクバラタナゴで、現在も元気に霞ヶ浦を泳ぎ回っています。

最近ではブラックバスやブルーギル、アメリカナマズなどが有名です。しかし、外来魚と言うだけで、釣り上げられると陸上に捨てられています。殺すのであれば持ち帰るようにしてください。放置されると腐って悪臭が漂い、蛆がわき、公衆衛生上も良くありません。それと、無暗な殺生と魚の不法投棄は犯罪になりますよ。

さて、話を霞ヶ浦の魚に戻しましょう。やはり有名なのはコイですね。なんと言っても日本一の養殖と出荷量ですからね。しかし、需要が減っていることもあって年々出荷量は減少しています。

その一方でコイ釣りは盛んに行われています。霞ヶ浦のコイは大きいので人気なのです。で、その大きなコイを釣り上げるには、タニシやザリガニなどを餌にします。草食と思われているコイ、実は雑食で大きくなると肉食性が強くなるのは、一般的には知られていません。

霞ヶ浦で有名な水産物にテナガエビがあります。居酒屋で川エビと称して売られている多くは霞ヶ浦産のテナガエビです。霞ヶ浦にはテナガエビの他に、スジエビやミナミヌマエビなどが棲息しています。エビの産卵は7月から9月頃に行われます。

さて、そのエビですが産卵直後は、多くの魚たちの好餌になっています。特に、日本一生息数が多いと言われているハゼ類にとって、エビの子どもたち（ゾエア）は格好の餌です。また、汽水域に棲息している甲殻類の一種のイサザアミが霞ヶ浦には棲息しており、これも小魚たちの好餌になっています。

そのハゼ類、霞ヶ浦には1平方メートルに20匹ほどのハゼ類が棲息しているそうです。1平方メートルに20匹以上と言うことは、霞ヶ浦の総面積が220キロ平方メートルなので、2億2千万平方メートル×20匹で44億匹と言うことですね。

さて、ハゼ類の中で思い出すのはヌマチチブです。それは上皇様による分類が行われたからです。それまでチチブとされていたものの中に、泳ぎ方が違うと言うことで研究なさり、チチブとヌマチチブを分類されたのです。そんな逸話のあるハゼの仲間のヌマチチブです。

ハゼの仲間では海に棲息しているマハゼが有名です。そのマハゼが近年霞ヶ浦で多数捕獲されるようになりました。2010年からモニタリング調査を始めた常陸川水門の魚道の影響だと思われます。2017年には魚道の試験運用が始まり、この魚道の完成によってワカサギの遡上はもとより、シラウオやアユ、ハゼ類の遡上も増えました。同時にテナガエビやモクズガニなどの甲殻類も増えました。小さな魚道であっても水が動くことによって、生物たちは活発に移動するようになるのです。

常陸川魚道の運用によって水が動いたことで、近年は海のスズキが常陸川や北浦で頻繁に釣れるようになりました。霞ヶ浦でもかなり上流域まで遡上しています。また、魚道によって天然アユの遡上も見られるようになり、動く水に期待が集まります。

（吉田　幸二）

霞ヶ浦の
阿見町沿岸小旅
新屋敷水門
島津水門
島津橋留り
石積み
防衛省
技術研究所
粗朗沈床
新馬木門
大室国体コース
大室水門
大室橋留り
大室水門
愛宕水門
自衛隊武器学校
龍室川
霞スポーツ護岸
予科練平和記念館

② 霞ヶ浦　湖岸の暮らし

＜「カワ」（霞ヶ浦）の守り神＞

霞ヶ浦の湖岸に生まれ育った人たちは、この湖を「カワ」と呼んできました。

霞ヶ浦には、昔、四十八津の入江があって、そこには小さな船着場がつくられており、そこを「エンマ」と呼んできました。

「エンマ」の近くには必ず「水神様」と「水天宮様」が祀られています。

「水神様」は水の神様で霊験あらたかだとされています。「水天宮様」も「水神様」と同じようなご利益があり、子授や安産のご利益もあると言われています。

昭和30年頃までの、堤防が出来る前ころには、「水神様」のある湖岸は、水のきれいな遠浅の砂地で、子どもたちの水泳ぎの場所でした。子どもたちはカワに入る時には「水神様」の前で必ず手を合わせて「河童に引き込まれませんように」とお願いをし、カワから上がると「ありがとうございました」と手を合せました。

年に１度の「水神様」のお祭りが「カワピタリ」です。昔は旧暦の12月１日でしたが、いまは新暦の12月１日が祭礼の日です。漁をやっている人、船を動かしている人、霞ヶ浦を利用している人らが揃って、「水神様」に新しい注連縄を張り、お神酒を上げ、お餅を供えます。そして神前で両手を合せて「今年は魚がたくさん取れてありがとうございました」「水難事故も起らず安心して過ごせました」「子どもたちも水の事故が起きずありがとうございました」と感謝を捧げます。

そして、「来年も豊漁でありますように」「水難事故が起きませんように」とお願いをします。

水神宮（廻戸地内）

水神宮（大室地内）

＜カワ（霞ヶ浦）の恵み＞

今は昔、湖岸には堤防はなく、砂浜から遠浅の湖面となっており湖水は澄んでいました。私たちは霞ヶ浦で産湯を使い霞ヶ浦の水を飲んで育ちました。子どもたちの遊び場は、５月から盆の前まではカワ（霞ヶ浦）、それ以後冬はヤマ（林、森）でした。

夏の暑い日には１日に３回もカワに入ったものです。お昼前に１回、お昼過ぎに１回、そして夕方に風呂代わりに１回と。夕方の水浴びは「河童に引き込まれるからカワに入ってはいけない」と家の人にきつく言われました。しかし、水がぬるくなっており、ついつい気持ちが良いので入ってしまいます。

まともに家に帰ったら怒られるのはわかっているので、先手を打って母親にシジミを夕食のみそ汁の実にと差し出します。その頃は湖岸の浅瀬の砂の中にはシジミがいて、それを両手に一杯ほど採って家に持ち帰ります。入れ物がないのではいているパンツを脱いでそれにくるんで持ち帰ります。おそるおそる差し出すと、母も怒るに怒れず、ほめることも出来ずだまって受け取ってくれました。

夕食には家族みんなでシジミ汁をすすりました。そんな時父親などは「今夜のシジミは特に塩っぱいな」などと言ったものです。

（大﨑　治美）

砂浜（霞ヶ浦）

③ 阿見町の漁業

霞ヶ浦はたくさんの魚が獲れる豊かな湖です。その恵みに支えられ沿岸住民は豊かな食生活を楽しんできました。漁業も盛んで、ワカサギ、シラウオ、エビ、コイなどが名産です。それらを加工した佃煮も大人気です。ワカサギは漢字では「公魚」の字があてられます。

霞ヶ浦は遠浅で、上流からの流れが合わさり、栄養は豊富で、また海ともつながっていて淡水と海水が混じり合い、魚種も豊富でした。夏から初冬にかけてのワカサギ漁では帆引き船漁がよく知られています。筑波山を背景とした帆引きの風景は霞ヶ浦観光のシンボルともなっています。

帆引き船漁は明治のはじめ頃に折本さんという漁師の方が考案されたもので、この漁法の考案でワカサギ漁は夫婦二人でやれる仕事になりました。一世を風靡した帆引き船漁は、1960年代頃に近代的なトロール船漁に置き換わります。沿岸では定置網漁も盛んでしたが、外来魚のアメリカナマズが増えて網の小魚を食べてしまうようになり、残念なことに現在では廃れてしまっています。

ここで、霞ヶ浦漁業の特色ある漁法をいくつか紹介しましょう。

まず、手長エビ漁。手長エビは煮ても揚げてもとても食べやすく人気の産物です。竹笹を1～2メートルほどの太さに束ねて湖に沈めます。15～20日たつと、その竹笹の束に川エビたちが棲むようになり、それを静かに引き上げると手長エビがどっさりと捕れるというやり方です。

ウナギ漁。霞ヶ浦は天然ウナギの産地です。伝統的なウナギ漁は太い竹筒を使っていました。太い竹を1メートルほどに切って、節を抜き出口を塞いで湖に沈めておくと、そこにウナギが入り込み、出られなくなり、それを揚げて捕るというやり方です。

手長エビ漁も天然ウナギ漁も魚が豊富な霞ヶ浦ならではの漁法ですね。

鳥のカワウについてのこんな話もあります。霞ヶ浦にはカワウが生息していて、それも一つの風景ですが、漁民の方々にとっては、カワウは困った存在だとのこと。いつもは近寄ってこないカワウは網を揚げる頃になると寄ってきて、せっせと魚を食べてしまうそうです。

こうした霞ヶ浦の漁業には漁業権が設定されており、漁が出来るのは漁協の組合員に限られています。また資源保護のため禁漁期が設けられており、また、ワカサギについては人工ふ化による放流もされています。

（山﨑　政雄）

手長エビ　　煮ても揚げてもおいしい

ウナギ　　もう少し大きくなると　卵を産みに海に下る

④ 阿見町の釣り場

阿見町は霞ヶ浦に接する湖岸線がとても短いです。しかし、縄文海進の時代も含めて、長い時間を霞ヶ浦と共に過ごして来ました。近代では海軍飛行予科練習生の基礎訓練の場としても有名でした。

そんな阿見町にはつくば市を源流に持つ花室川と、125号バイパスに沿って流れる清明川の源流があります。どちらの河川も釣り場として有名です。

両河川での対象魚はコイやフナの他に、ブラックバス、ナマズ、ブルーギル、タナゴ、オイカワ、ウグイ、カワムツ、ワカサギなど多種な魚が棲息しています。しかし、中流から上流にかけては足場が高いこともあって、釣り人の多くは河口部に集中しています。

霞ヶ浦湖岸の釣り場としては、青宿、花室川、廻戸、大室、掛馬、島津があります。古くはエンマと呼ばれるヨシ原の水路や、小さいワンドが沢山ありましたが、湖岸を開発された霞ヶ浦では現在その姿は殆ど見られません。

●青宿地区

青宿にはスーパー護岸と称される石積みの波除けがあり、湖岸構造を複雑にしているために、多くの水中生物たちが棲息しています。また、シーズンによって接岸する魚種が異なるので、狙う魚の習性を良く熟知することが大切です。

コイやヘラブナに加えて、ブラックバスやブルーギル、テナガエビなどの釣果が有名です。また、季節によってはワカサギの釣果もあります。

交通：R125号線を土浦方面から来ると、霞ヶ浦高校の先の小さい交差点を左折して一旦湖岸まで直進し、道なりに左折すると青宿地区の石積みのある湖岸線に出ます。

テナガエビ

●花室川下流地区

タイリクバラタナゴ

花室川はつくば市玉取の田端を源流に、土浦と阿見町を経由して霞ヶ浦へと流れ込む、10キロメートルほどの流呈を持つ一級河川です。つくば市では、河床がコンクリートで整備されているため、雨どいのような川の流れですが、土浦市から阿見町にかけての河床は、土砂が堆積し水生植物帯などもあって、変化に富む河川に様相を変えています。

ヘラブナやコイ、各流れ込みではアカヒレタビラ、河口付近ではワカサギなどの釣果もあります。

交通：青宿地区と同様に霞ヶ浦高校の先の交差点を左折すると、花室川沿いの道になりこの辺りが下流域です。

●廻戸地区

モツゴ

廻戸は自衛隊武器学校の東岸に位置し、ヨシ原に覆われていますが、所々に小さいワンドがあって静かに釣りが楽しめます。しかし、ヨシ原を抜けて水に辿り着くには長靴が必要です。水神宮の横には小さな水門があって、それに連なる堤脚水路でもマブナやコイ、モツゴなどが釣れます。風波の影響が少ない水路の釣りは、のんびりと釣りが楽しめます。

揚排水水門周辺では、モツゴやヌマチチブ、タナゴ類、ブルーギルなどが釣れます。水位が高ければブラックバスなども入り込んできます。

交通：阿見町のR125号線沿いの予科練平和記念館の先の道路を左折し、道なりに進むと自衛隊武器学校を伝って湖岸に出ることができます。この辺りが廻戸で、水神宮の裏手には昔ながらのエンマが存在しています。

●大室～掛馬地区

アメリカナマズ

大室周辺では、大室船溜まりの傍にある水門周りで、アメリカナマズやコイなどが釣れます。また、その水門に連なる堤脚水路でも大小のフナやコイが釣れ、釣りを楽しむことが出来ます。掛馬の湖岸線には石積みがあるので、この場所もお薦めですが、ネガカリが多いので注意してください。

なお、新しく出来たボート用のスロープ周辺での釣りは禁止されていますので、くれぐれもルールを守って釣りを楽しんでください。

交通：R125号線の阿見坂下の交差点を直進して、霞ヶ浦高校のサッカーグランドの手前の信号を左折すると大室の湖岸線に出ます。右の水神宮辺りから見る筑波山と霞ヶ浦の夕景は釣りを忘れるほど見事です。

●掛馬～島津地区

ワカサギ

掛馬の湖岸全線は、中央部辺りを防衛省技術研究所（以下技研）に占有されているため、釣りの出来るエリアは技研を挟んだ両側だけになります。この両サイドには大きな水門があるので、魚たちが寄り付き易い深場を備えた構造になっています。

また、石積み堤やゴロタ石などがあり、タナゴやモツゴ、テナガエビなどの小さい魚たちに絶好の隠れ家を提供しています。水門周辺では季節によってワカサギ釣りが楽しめます。

交通：R125号線をさらに直進すると、霞ヶ浦高校のサッカーグランドがあり、その先を左折すると掛馬の湖岸線に出ます。さらにR125号線を直進して、リサイクルショップの手前を左折すると島津の湖岸線に辿り着きます。

●島津

ヌマチチブ

島津の湖岸線では水門が絡んだヨシ原周辺が狙い場です。また、水門周辺ではブラックバスやアメリカナマズなどの大物が釣れます。湖岸線ではタナゴやテナガエビ、モツゴ、ヌマチチブなどの釣果があります。堤脚水路ではタナゴやフナ、モツゴ、モロコなど、様々な淡水魚が釣れます。

交通：さらにR125号線を美浦方面に直進すると、左手に新聞店があるので、この先を左折すると島津の湖岸線に出ます。なお、この場でのゴミのポイ捨てはくれぐれも厳禁です。もし、ゴミがあったら拾って持ち帰り、処分するぐらいの心持ちを持って下さい。

ここに書き記したように、霞ヶ浦での魚釣りを成功させるには、他と違った湖底や水際の変化を探すことです。ヨシ原の切れ目や水門、砂地の石積み、乱立する杭など、湖岸線や湖底に変化を与えるものを探し出し、その場所を狙うと良いでしょう。

※水辺で釣りを楽しむときは、お子さんには必ずライフジャケットを着けさせましょう。
※釣り禁止のエリアがあります。ルールを守って釣りを楽しんでください。
※ゴミは持ち込まずに持ち帰る…マナー厳守です。

※魚によっては禁漁期があります。詳しくは霞ヶ浦北浦水産事務所のサイトで。
http://www.pref.ibaraki.jp/nourinsuisan/kasui/contents/ruleandmanner.html

（吉田　幸二）

⑤ 釣り人たちの霞ヶ浦清掃活動

私たちが行っている霞ヶ浦クリーン大作戦「53 Pick Up!」と言う霞ヶ浦の清掃活動は、今年で24年47回を終了しました。この「53 Pick Up!」と言うのは、53（ゴミ）Pick Up（拾う）と言う意味です。

溢れる栄養ドリンク瓶

1995年2月にスタートしたバス釣り人による水辺の清掃活動では、参加者（ゴミ拾いをする者）は拾い集めたゴミの処理を、自分たちで費用を供出して行っています。きっかけは、ゴミにも行政区分があったからです。

霞ヶ浦のゴミは霞ヶ浦河川事務所、流入河川のゴミは茨城県、陸域は当該市町村のそれぞれが処分するという取り決めがありましてね、ボランティアでゴミ拾いをしても、そのゴミの処理をどこか一ヶ所にお願いすることが出来ないのです。

ゴミに住所や名前があるじゃなし、拾ったゴミをどこで拾ったのかを分別しながら処分するのはかなり面倒だし…と言うことで、拾い集めたゴミの処理を産業廃棄物業者に依頼して自分たちで処分するようにしました。

湖岸にゴミが溢れている

ゴミを拾う

でも、これだと処分費用が掛かります。この費用をどこで捻出しましょうか？と言うことになり、参加者の皆さんにお願いしたところ、皆さん費用の供出を快諾してくれて現在に至っております。参加費はスタート当時から千円です。もう暫くは、これで何とかやり繰りをしたいですね。

最初は地球を救う…なんてぇ大仰なことは考えていませんでした。霞ヶ浦で釣りを楽しむためにゴミのない水辺にしたい…そう考えていただけです。しかし、ここ最近の海洋プラスチックゴミの影響が、地球の破壊に多大であることを知り、太平洋に流れ出る前の霞ヶ浦で人工的なゴミを回収することは、海を守り、しいては地球を守ることに繋がっていると認識した次第です。

実際、「53 Pick Up!」では年間に３トンから４トンの人工的なゴミを回収しています。霞ヶ浦のゴミの総量からすると極めて僅かですが、この量のゴミは確実に海に流出しませんし、霞ヶ浦の湖内で悪さもしません。だから、私たちはゴミを拾い続けるのです。

ゴミ拾いをしていると、拾う努力よりも捨てさせない方策を考えるべきだ…と、お声掛けくださる人がいます。捨てさせない施策は、法整備も含めて行政や製造責任者の企業が、足並みを揃えてやるべきことです。今あるゴミを拾う活動に対して、あれこれ言う前に貴方がその運動を広めて欲しいですね。

ゴミ回収バケツ

ゴミ回収をする軽トラック

バスフィッシングが楽しめる霞ヶ浦だから、私たちは一所懸命に水辺のゴミを拾います。もしバスフィッシングができない湖沼になったら？　そりゃゴミ拾いなんざぁしませんよ。私たちの唯一無二の楽しみであるバスフィッシングを、未来永劫楽しめるためにスタートした水辺の清掃活動ですからね。

自分たちのフィールドは自分たちが守る。ゴルファーや野球の選手など、スポーツ選手の皆さんの多くが、自分たちの楽しみであるフィールドを汚さないのと同じことなのです。

（吉田　幸二）

53 Pick Up! の受付風景

分別作業

参加者集合！　（Ｊリーガー西大伍選手の協賛品）

⑥ 霞ヶ浦のカモの仲間

阿見町は、花室川河口付近から清明川河口付近まで、数キロメートルにわたって直接、霞ヶ浦に接しています。この霞ヶ浦には、10月頃から4月頃まで、たくさんのカモの仲間が渡ってきて、湖岸や湖上に集まっているのを見ることができます。

また、その湖岸には舗装された堤防が連なり、霞ヶ浦を広く観察する好条件に恵まれています。

カモの仲間については、日本野鳥の会が、毎年1月に「全国ガン・カモ一斉調査」を実施して、種類と個体数を調べています。この調査は、早朝から実施され、湖岸や湖面にいるカモを一々望遠鏡などを使って種類ごとに数え、集計するものです。

ここ数年のデータによりますと、霞ヶ浦全体では15種から19種、個体数にして5万羽から7万4千羽程が、冬を越すためにやって来ます。

このうち阿見町正面の霞ヶ浦では、年ごとに12種から13種、3800羽から6300羽ほどが記録されています。ちなみに、これまでに阿見町で確認されたカモの仲間は、「阿見町鳥類目録」にリストアップされた22種に及びます。本書では、この中で比較的見る機会の多い14種を紹介しています。

なお、霞ヶ浦以外でも、南平台のガーデンシティ湖南の遊水池「水彩の池」は、毎年400羽前後のカモが羽を休めていて、カモをゆっくり観察できる穴場の一つです。

この人工の池は、出来てから20数年になりますが、最近はハシビロガモとヒドリガモが多数を占めるほか、ヨシガモ、コガモなども見ることができます。このほか、カルガモ、マガモ、オカヨシガモ、オナガガモなども時々見かけます。以前は、ミコアイサも毎年来ていましたが、2018年4月には阿見町で初めて、旅鳥のシマアジが1羽、やってきました。「阿見町鳥類目録」の165種目の鳥です。

皆さん、阿見町では、こんなに手軽に沢山のカモの仲間を見ることができます。双眼鏡などで見ると、本当にきれいで、楽しくなりますよ！一度、試してみませんか？

（久留島　昭彦）

霞ヶ浦風景（湖面に砂のように見えるカモ達）

南平台の「水彩の池」のカモ達とカワウ

第Ⅱ部　阿見町の生きものたち　図鑑ガイド

1．野鳥たち

－ 図鑑担当：久留島　昭彦 －
一部写真提供　海老原　信一　佐野　茂

阿見町は、北東部の約5キロメートルが霞ヶ浦に面しており、最も標高の高いところでも、海抜30メートルにも満たない、平坦な稲敷台地上に拡がる中規模の田園都市です。

町内には、花室川、清明川、桂川、乙戸川の4河川が流れ、特に清明川の水源は阿見町内にあり、最も広い流域面積を占めています。

これ等の河川沿いや、霞ヶ浦湖岸の低地は、蓮田や水田として利用されて、これ等は多くの水鳥達の生活の場となっています。また、稲敷台地上には、平地林や耕作地が散在し、各河川の支流沿いの谷津田や斜面林が数多くあり、これらも多くの鳥達の生活を支えています。

霞ヶ浦湖上に点々と休むカモ達

霞ヶ浦湖岸に集うサギの仲間達

【阿見町の豊かな自然環境】

自然豊かな平地林の様相

水のしみ出してくる谷津頭の様子

高い山もなく、海にも面していない環境にもかかわらず、阿見町には、霞ヶ浦由来の水鳥をはじめ、生態系の頂点に位置する猛禽類も沢山生息しており、しかも、それが日常の生活の中で、出会う機会が沢山あるということは、大変幸せなことと思います。

阿見町では、平成23・24年度に行われた環境保全基本調査と、その後の補完調査や各種の資料に基づき、これまでに外来種4種を含む165種の野鳥が確認されています。　（「阿見町鳥類目録」参照）

本書では、この中から比較的よく見かける鳥を中心に、写真でご紹介します。

なお、種類ごとに掲げた写真には、種名、体長（L）、生息時期を簡単に付記していますが、体長は、鳥を仰向けに寝かせた状態で、嘴の先端から尾羽の先端までの長さを示し、生息時期（留鳥、夏鳥、冬鳥、旅鳥等）は、一般の図鑑などで示されている我が国全体としての生息状態ではなく、阿見町での生息状態を示しています。

まず初めに、地域のシンボルとして定められている鳥達について、紹介します。

【阿見町の鳥　ウグイス】

ウグイス　L：15cm　留鳥

スズメとほぼ同じ大きさで、藪の中に居ることから、なかなか姿を見せて見せてくれませんが、春になると　「ホーホケキョウ」（法一法華経）と囀る声をよく聞くことができます。囀るときは、この写真のように、良く目立つところに居ることが多いので、声を聞いたら、是非、姿を探してみましょう。
なお、「鶯色」は、本来この写真のように、灰色がかった緑褐色なのですが、一般に、もっと緑色がかったメジロのような色と誤解されていることもあるようです。

【茨城県の鳥　ヒバリ】

ヒバリ　L：17cm　留鳥

阿見町でも、春になると耕作地や草原で、空高く飛びながら、「ピーチク、パーチク」と囀っている姿をよく見かけます。
これを「揚げ雲雀」と称して、昔から有名です。
ただ、残念なことに、近年その数が急激に減少し、最近、東京では、ほとんどその姿を見ることとができなくなってしまったとのことです。
茨城県では、そのようなことにならぬよう、ヒバリの住みやすい環境を保ち、いつまでも県の鳥として、身近で親しめるようにしたいものです。

【日本の国鳥　キ　ジ】

キジ（オス）　L：80cm　留鳥

オスは写真のように美しく、繁殖期には、「ケーン、ケーン」とよくとおる、大きな声で鳴き、縄張りの宣言をしています。
日本の固有種で、「桃太郎」などのおとぎ話や、「古事記」、「万葉集」等の古典や、様々な歌や文学にも度々登場するおなじみの鳥です。
阿見町では、農耕地や、草原等で雄が悠然と歩いている姿をよく見かけ、ある時には、車両の行き交う国道を家族群で横断する姿を見たこともありました。

キジ（メス）　L：60cm　留鳥

メスは、全身が淡褐色の地に濃褐色の斑紋のある目立たない色で、「焼け野の雉子」の諺どおり、身をもって子どもを護る母親を象徴するように語り継がれてきました。

人家の近くでもよく見かける鳥

スズメ　L：14.5cm　留鳥

人々の生活の中にすっかり溶け込んでいて、家の周りで、いつでもどこでも見かけます。
しかし、じっくり観察すると、意外に可愛くて、様々な発見がありますよ。
例えば、頭の茶色の部分が、背中の茶色とつながっているのか、いないのか。一度確かめてみませんか。

ツバメ　L：17cm　夏鳥

春本番を告げるおなじみの鳥で、人家の軒下などに巣を作り、子育ての一部始終を見せてくれる最も身近な鳥です。
頭から背、尾にかけて、紺色の光沢のある黒色で、下面は白色、額と喉は赤褐色です。
鳴き声は複雑で、「虫食って、土食って、しぶーい」などと、聞きなされています。

ハシブトガラス　L：57cm　留鳥
ハシボソガラス　L：50cm　留鳥

誰でも知っているカラスですが、通常、写真のように２種類がいます。
ハシブトガラスは、額が出っ張り、上嘴の先端が大きく湾曲していて太く、鳴き声は「カァー、カァー」と澄んだ声です。
ハシボソガラスは、体は一回り小さく嘴も真直ぐで、「ガァー、ガァー」と濁った声です。

ムクドリ　L：24cm　留鳥

全身が概ね灰黒褐色で頭部は特に黒く、額から頬は白く、黒褐色の斑点があります。
「キュルキュル、リャーリャー」等とやかましく鳴き、芝生や耕作地などで、歩いて虫などを捕食しています。
よく群を作って行動しますが、時には何万羽も集まり、鳴き声やフンなどで、各地で公害騒ぎを起こすことがあります。

キジバト　L：33cm　留鳥

全身がブドウ色がかった灰褐色で、眼が赤く、頸の側面に、黒と青灰色の縞模様があるのが特徴です。「デデッポォッポォー」と繰り返して鳴きます。
年に何度も繁殖し、人家の庭木や藤棚などにも巣を架けて子育てすることもあります。
寺社などに群れる灰黒色が主体の外来種のドバトとは、区別が容易です。

ヒヨドリ　L：27.5cm　留鳥

全身が灰褐色で、頭部はやや明るい青灰色、腹部は灰白色で褐色の耳羽が目立ちます。
山林から耕作地、市街地の人家周辺まで広く生息しています。「ピィーヨ　ピィーヨ」と大きな声で鳴き、波形を描いて飛びます。
花の蜜や、柿の熟しなど、甘いものをよく食べ、ツバキの花に顔を突っ込み、花粉で顔を真っ黄色にしていることもあります。

シジュウカラ　L：15cm　留鳥

頭部は黒、背は青灰色、腹部は白く、頬の白色部と腹部中央の黒線が目立ちます。
「チッジュクジュクジュク」と地鳴きし、「ツツピー、ツツピー」などと囀ります。
市街地の公園や、住宅の庭などにも普通に飛来し、秋から冬には、他のカラ類等と群を作って行動することもあります。

ヤマガラ　L：14cm　留鳥

胸から上は黒と白褐色のツートーンカラーで、肩と翼は青灰色、下面は茶褐色です。
囀りは、シジュウカラよりゆっくりしたテンポで、「ツーツービー、ツーツービー」と繰り返します。住宅地の公園などにもやって来て、人をあまり恐れず、手のひらにピーナツなどを置いて動かずにいると、手の上に飛来して取って行くこともあります。

エナガ　L：14cm　留鳥

小さな白い綿の球に黒い細長い柄を付けたような、我が国で最少クラスの可愛い鳥です。
「チーチージュリジュリジュリ」などと鳴き、通常、群で行動し、秋や冬には、他のカラ類やメジロなどとも混群を作って行動することもあります。

メジロ　L：12cm　留鳥

スズメより大分小さく、体の上面は暗黄緑色、喉は黄色、胸以下の下面は汚白色で、アイリングの白さが際立っています。
「チーチーチー」などと鳴き、市街地の公園や住宅の庭にもよく来て、ツバキ、ウメ、サクラ等の花の蜜を吸ったり、熟した柿の実などを好んで食べています。

カワラヒワ　L：15cm　留鳥

スズメよりやや小さく、一見全身がオリーブ褐色で、尾は先が凹んだ凹尾です。
飛ぶと、翼に黄色の帯が目立ちます。
雑木林や市街地の公園にも普通に居て、「コロコロ　ビィーン」などと鳴きます。夏には、庭のヒマワリの種を食べに来たりします。冬には、群を作って行動し、耕作地の電線などによく集まっています。

ジョウビタキ　L：14cm　冬鳥

オスは頭上が灰白色、顔から喉は黒色、腰と体の下面は橙色で、翼に白斑があります。
メスは全身が灰褐色で、翼の白斑はオスと同じで紋付の様なところから、「紋付鳥」と呼ばれることもあります。「ヒッヒッ、カッカッ」と鳴き、公園や庭にも秋一番で渡ってきます。あまり人を恐れず、土を耕すすぐ傍で、出てくる虫を捕食することもあります。

ホオジロ　L：16.5cm　留鳥

里山の野鳥を代表する鳥です。
スズメよりひとまわり大きく、顔は白黒のまだら模様で頬の部分が白いのが、名前の由来でしょう。
木や草の頂点で、「チッチーツクチューツクツクチュー」とよくさえずっていますが、昔から「一筆啓上仕り候」などとの「聞きなし」が有名です。

アオジ　L：16cm　冬鳥

スズメとほぼ同じ大きさで、頭部から体の上面は緑灰色で目先はほぼ黒色です。下面は黄色で脇に褐色の縦斑があります。
通常は、農耕地や市街地の公園の植込みの中などに居て、「ツッ　ツッ」と地鳴きし、また、地上で餌をとります。
夏には、標高1000m以上の高原で繁殖します。

耕作地や平地林などで見られる鳥

コゲラ　L：15cm　留鳥

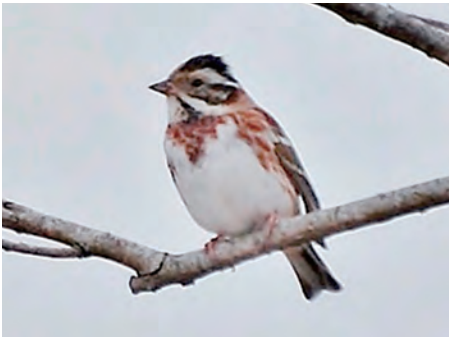
スズメとほぼ同じ大きさの小型のキツツキです。
体の上面は、濃褐色で白い横縞があり、体の下面は白く、脇に褐色の縦斑があります。
「ギィーッ、ギィーッ」と鳴き、低地の林などでシジュウカラなどと混群を作ることもよくあります。

センダイムシクイ　L：13cm　夏鳥

メジロとほぼ同じ大きさです。上面は黄色味がかったオリーブ色で、白い眉斑が目立ち、下面は汚白色です。
落葉広葉樹林に生息し、町内では、谷津田の斜面林等にも生息しています。
「チィョチィョチィョ　ビィーン」と囀る声は、「焼酎一杯　ぐぃー」と聞きなされています。

ベニマシコ　L：15cm　冬鳥

スズメよりやや小さいくて、尾が長く、このように赤い色の野鳥は、阿見町では、まず、他に見る機会はないでしょう。
ただ、このように赤いのはオスだけで、メスは全身が淡褐色の地味な色をしています。
嘴は肉色で短く、草の種などを食べます。
低木林や湖畔の葦原、草原などで、数羽の小群を作って行動することが多いです。



カシラダカ　L：15cm　冬鳥

スズメとほぼ同じ大きさで、頭部から体の上面は褐色で、腹部は白く、胸と脇に茶色の縦じまがあり、頭に羽冠があるのが特徴です。
通常は、農耕地や林縁、川原などの藪で小さな群を作って生活し、地上で草の種などを啄んでいます。

ウソ　L：16cm　冬鳥

スズメより少し大きくて、ややずんぐりしています。灰色の体に対比して、頭頂から顔の上半部の黒色と、頬から喉にかけての赤色が目立つ、美しい鳥です。
林や藪で木の芽などを食べていますが、春先には公園の梅や桜の花芽を食べるので、桜の名所などでは駆除されることもあります。

シメ　L：18cm　冬鳥

尾が短く、体形はずんぐりとしています。
頭と顔は茶褐色、目先と喉は黒色、背は暗褐色、下面は淡褐色で、尾の先端の白が目立ちます。嘴は肉色で太く大きく、渡りの時期が近づくと、写真のように鉛色になります。
落葉広葉樹林に多く、阿見町では総合運動公園や、住宅地の公園などでも見られます。

アカハラ　L：24cm　冬鳥

体の上面はオリーブがかった褐色で、頭部はより黒味のある色をしています。胸と脇は橙赤色で、名前の由来です。腹部は白色で、胸の橙赤色の中に、三角形に食い込んでいます。
「キョッ、キョッ」と鋭い声で鳴き、冬には平地林や住宅地の公園などにも来て、木の実やミミズなどを食べています。

ツグミ　L：24cm　冬鳥

黒い頬を挟んで眉班と喉の黄白色が目立ち、翼の茶色と下部の白の対比も認識しやすい鳥です。ただ、下部に点在している黒点は、個体によって濃淡は様々です。
「クィッ　クィッ」と鳴き、芝生、畑地、草原等の開けた場所で餌を採り、大型ツグミの中で、最も身近にみられる鳥です。

シロハラ　L：24cm　冬鳥

ツグミ、アカハラとほぼ同じ大きさです。頭部は暗灰褐色で、背及び胸から脇は灰褐色で、腹部中央は白色です。
尾羽は暗灰褐色で、先の両端が白く、飛ぶとよく目立つのが特徴です。
アカハラとよく似た鋭い「キョッ、キョッ」と言う声で鳴き、平地林や市街地の公園の暗い林に居て、地上で餌を採ります。

ホトトギス　L：28cm　夏鳥

自分で子育てをしないで、ウグイスなどに拓卵する習性で有名です。
阿見町では、5月中旬頃から、盛んに空を飛びながら、「キョキョッ、キョキョキョキョ」と鳴く声を聴きます。この声は、「東京特許許可局」などと聞き為されています。
また、古くから、様々な歌や、文学で取り上げられてきた、有名な鳥です。

モズ　L：20cm　留鳥

頭が大きく橙褐色で、背は青灰色、下面は橙色で尾は長く黒色です。顔には黒い太めの過眼線があり、嘴は黒く、先が鋭く曲がっています。
秋には「キィー　キィキィキィ」といわゆる高鳴きをして縄張り争いをします。
また、トカゲや昆虫を木の枝などに刺しておく「百舌の早贄」でも有名です。

コジュケイ　L：27cm　留鳥

キジの仲間で中国由来の外来種です。
尾も短く、ハトを太らせたような体形で、低山や平地の藪、公園などの藪の中に生息し、数羽の群れを作って、地上で餌を採っていることが多いです。「ピッピッピッ、ピィッチョホィ、ピィッチョホィ」などと大きな声で鳴きます。この声が「ちょっと来い、ちょっと来い」と聞こえるので、有名です。

森林．山地などで見られる鳥

アカゲラ　L：24cm　留鳥

中型のキツツキで、ムクドリと同じぐらいの大きさで、「キョッ　キョッ」と独特の大きな声で鳴きます。
黒と白と赤の対比がはっきりしていて、識別は比較的容易です。黒い背に逆八の字のような太い白斑と、下面の白及び下腹部の赤斑が目立ちます。オスは、更に、後頭部に赤斑があります。

ルリビタキ　L：14cm　冬鳥

スズメよりやや小さく、上面は青色で、眉斑と喉が白く、胸以下の下面は汚白色で、脇は橙色の美しい鳥です。
北海道や高い山の針葉樹林で繁殖しますが、阿見町では、冬季、平地林の周辺や耕作地、公園などの深い藪にいることが多く、姿を見せてくれる機会は少ないようです。

キビタキ　L：13cm　旅鳥

スズメより一回り小さく、上面の黒、眉班と下面の黄色、翼の白斑の対比が美しい鳥です。「ピチュリーリ　オーシツクツクピッコロロ」などと複雑な美しい声で囀りますが、セミの「ツクツクボウシ」の鳴き声に似たフレーズが入るのが特徴です。
5月頃、町内の深い平地林で、囀りを聞くことがあります。

オオルリ　L：16.5cm　旅鳥

スズメよりやや大きく、頭上から上面の青、顔から胸の黒、腹部から下の白の配色が美しい鳥です。
渓流沿いの森林を好みますが、梢の先で「ヒーヘイヘイヘイ　ジュクジュク」などと美しい声で囀ります。
阿見町では5月頃に南東部の平地林などで、美声を聴くことがあります。

サンコウチョウ(メス)　L：17.5cm　夏鳥

コバルトブルーのアイリングと長い尾羽が目立ちます。写真はメスですが、オスの尾羽は30cm以上もあります。
「チッチョホイ　ホィホィホィ」と早口で囀る声を「月日星　ホィホィホィ」と聞きなしたのが三光鳥の名前の由来とのことです。阿見町でも、深い平地林でこの声を聞くことがあります。

ソウシチョウ　L：15cm　留鳥

ヒマラヤから東南アジアが原産の外来種で、営巣場所が競合するウグイス等を駆逐する危険があるため「日本の侵略的外来種ワースト100」に指定されています。
茨城県では、筑波山の標高1000m以上の樹林で繁殖が確認されていますが、阿見町では、南東部の谷津田の斜面林で繁殖しています。

水辺で見られる鳥

ハクセキレイ　L：21cm　留鳥

低地の水辺に生息し、一見セグロセキレイとよく似ていますが、背中が灰色です。その他、セグロセキレイとの見分け方は、顔の模様と鳴き声がポイントです。
ハクセキレイは、顔が白くて過眼線が黒です。
また、飛んだときは、「チュチュン、チュチュン」と澄んだ声で鳴きます。

セグロセキレイ　L：21cm　留鳥

セグロセキレイは、日本にだけ生息している我が国の固有種で、通常、内陸の湖畔や渓流に居ます。
ハクセキレイと違い、頭上から顔、背中、胸が黒くて、眉斑が白です。
また、飛んだ時には「ジェジェイ、ジェジェイ」と濁った声で鳴きます。

キセキレイ　L：20cm　冬鳥

通常、山地の渓流などに留鳥として生息しますが、阿見町では、冬に見られます。
写真は、胸の黄色が薄く、メスの冬羽ですが、オスの夏羽は、喉が黒く、下面は全面黄色になります。
飛んだときは「チチン、チチン」と金属的な澄んだ声で鳴きます。

オオヨシキリ　L：18.5cm　夏鳥

霞ヶ浦湖岸や河川沿いの広い葦原に生息しています。
上面は灰褐色、下面は淡褐色の地味な鳥で、芦などの茎に身を立てて止まり、口を大きく開き、橙赤色の口内を見せながら、「ギョギョシ、ギョギョシ」と大きな声で囀ります。「行々子」という別名は、この鳴き声に由来したものです。

カワセミ　L：17cm　留鳥

ほぼスズメ大の鳥ですが、嘴と頭が大きく、尾が短い独特の形をしています。上面は光沢のある青緑色で、中央は明るいコバルトブルーに光り、喉と頸側には白色部があり、よく目立ちます。
美しい色や、水中に飛び込んで魚を食する様子が、意外に身近で見る機会が多く、名前もよく知られていて人気の的です。

セッカ　L：12.5cm　夏鳥

メジロぐらいの小さな鳥で、草原で繁殖します。
姿は中々見えないけれど、霞ヶ浦湖岸の平地で、「ヒッヒッヒッ…」と鳴きながら上昇し、「チャッ、チャッ、チャッ…」と鳴きなが下降する、囀り飛行の様子を見ることがあります。

ケリ　L：36cm　冬鳥

大型で、特に足の長い千鳥です。頭部、顔、胸及び背の上面は灰褐色、腹部は白色で、胸と腹部の境には黒帯があり、また、脚と嘴は明るい黄色で、嘴の先端は黒色です。
畑地、草原などに飛来し、阿見町では、本郷付近で見ることが多いです。
飛行中は、翼の下面の大部分と腹部の白と、翼端の黒との対比がよく目立ちます。

タゲリ　L：32cm　冬鳥

大型の千鳥で、写真のように、頭頂が黒く、飾り羽がよく目立つのが特徴です。
頸の後ろから背中にかけて緑がかった黒色で、青緑色や紫色の光沢があり、また、顔と腹部が白く、胸に幅広の黒帯があります。
主として、蓮田など、水気のある平坦地に少数の群で飛来し、阿見町では、内陸部の蓮田などで、よく見かけます。

ムナグロ　L：24cm　旅鳥

中型の千鳥で、顔、頸と胸の前部及び腹が黒く、頭頂から体の上面は、黄褐色と暗褐色のまだら模様で、その境い目に沿って、額、頸、胸に続く白線が走っています。
阿見町では、春の渡りの４・５月頃に、蓮田、水田、草地などに数羽から数十羽の群で、見かけます。

コチドリ　L：16cm　夏鳥

我が国最小の千鳥です。
顔から腹部にかけて白く、黒い嘴から続く太い過眼帯があり、また両眼をを繋ぐように、頭頂部を黒い帯が走っていて、眼の周りの黄色い輪が目立ちます。
蓮田、水田などで行動し、阿見町で最もよく見られる千鳥です。

セイタカシギ　L：37cm　旅鳥

細長くて黒い嘴と、ピンク色で細く長い脚が特徴で、緑がかった光沢のある黒い背と体の下面の白色の対比と相まって、その美しさは、一度見たら忘れられないシギです。
水辺、水田、蓮田などに飛来し、阿見町でも、春と秋の渡りの途中で、運が良ければ見ることができます。
絶滅危惧種に指定されています。

イソシギ　L：20cm　留鳥

小型のシギで、蓮田、水田、湖岸などで、最も普通に見られるシギです。
頭部から体の上部が暗緑褐色で、腹部は白く、翼の前面で、この白色部分が上部まで食い込んでいるのが特徴です。
「チィーリーリー」と鳴き、よく尾を上下に振りながら行動しています。

タシギ　L：26cm　冬鳥

ずんぐりとした体に細く長い真直ぐな嘴を持ち、腹部が白い他は、全身が淡褐色と黒褐色の模様で覆われています。
この仲間は、オオジシギ、チュウジシギなど、見かけはそっくりな種類が多く、識別はなかなか困難です。
水田、湿地などに生息し、地中に長い嘴を突き刺して採餌します。

タマシギ（左：オス、右：メス）　L：23.5cm　留鳥

写真のように、通常とは逆で、オスよりメスの方が派手な色をしていて、一妻多夫で繁殖し、オスが抱卵し、雛を育てます。
水田、湿地などに生息し、繁殖期には、メスが、夕方から夜にかけて、「コォー、コォー、コォー、」と鳴きます。
絶滅危惧種に指定されています。

ダイサギ　L：80～104cm　留鳥

我が国最大級のサギです。
全身が白色のダイサギ、チュウサギ、コサギ及び冬羽が白くなるアマサギの４種をすべてシラサギと俗に総称されることが多いのですが、シラサギという種名はありません。
写真は冬羽ですが、夏羽は胸と背に長い飾り羽を生じ、嘴は黒色となります。

チュウサギ　L：69cm　夏鳥

ダイサギとコサギの中間の大きさのサギで、嘴が特に短く、ダイサギやコサギと比べるとその短さがよくわかります。
写真は夏羽に移行中の個体で、嘴が黒くなりかけています。

コサギ　L：60cm　留鳥

チュウサギより一回り小型のサギで、嘴が長く、年中黒色です。また、脚は黒色ですが、一番の特徴は、足先と指が黄色いことで、これが確認できれば、他のサギと間違えることはありません。
写真は冬羽ですが、夏羽では、後頭に長い2本の冠羽と、胸と背に長い飾り羽が生えてきます。

アマサギ　L：51cm　夏鳥

コサギより一回り小型で、嘴も首もコサギより短かく、夏羽は、写真のように橙黄色の飾り羽がありますが、冬羽は全身が白くなります。
他のシラサギよりも、乾燥した草原などを好み、畑などを耕す耕運機の後を群れを為してついて回り、出てくる蛙や虫を採って食べていることがよくあります。

アオサギ　L：95cm　留鳥

我が国最大級のサギです。
全身がほとんど灰色系ですが、顔から頸にかけてはほぼ白に近い灰色です。目の後から後頭部にかけて黒帯があり、後頭部には黒色の羽冠があります。
霞ヶ浦湖岸の蓮田や水田では、採餌したり休んだりしている姿をよく見ることができます。

ゴイサギ　L：57.5cm　留鳥

前掲のサギ達と異なり、通常は首を縮め、背を丸めてずんぐりとした姿勢でいます。頭と背が青味がかった黒色で、後頭に白く長い冠羽があります。翼と尾は灰色で下面は白色です。なお、幼鳥は右の写真のように、全身が褐色で白斑や淡褐色の斑点に覆われ、俗に「ホシゴイ」と呼ばれ、成鳥より見る機会は多い程です。

オオバン　L：39cm　留鳥

全身が黒く、嘴と額板だけが白く、容易に識別できます。足指は長くて特異なヒレが付いているので、泳ぎは得意で、主として水面で行動し、潜水して採餌していますが、岸に上がって休んだり、採餌したりすることもあります。
霞ヶ浦では、200羽前後の群を作って、行動しているのをよく見かけます。

バン　L：32cm　留鳥

頭部から体の下面は灰黒色で上面は黒褐色です。体側に白斑があり、尾の部分の両側にも白色部があります。額板と嘴が赤く、嘴の先端と脚は黄色です。
湖沼、河川、湿地などに生息し、霞ヶ浦湖畔の蓮田や葦原でよく見かけますが、オオバンのように群で行動することは殆どなく、単独で行動し、採餌することが多いです。

湖上・水面上などで見られる鳥

ユリカモメ　L：41cm　冬鳥

小型のカモメで、霞ヶ浦に最も多く飛来するカモメです。頭部、体の下面及び尾が白く、背と翼の上面は青灰色で、翼端は黒く、嘴と脚の赤橙色が目立ちます。
霞ヶ浦ではごく普通に見られ、数十羽の群で行動し、沖の水面で休んだり、飛び回ったり、湖畔の水田に集まって、採餌していることもあります。

カワウ　L：82cm　留鳥

阿見町で見られる唯一のウです。
全身が殆んど黒色で、暗緑黒色の艶があります。繁殖期には、足の付け根に大きな白斑が現れ、顔には、細く白い羽毛が生えますが、個体によって現れ方には変化があります。
数に大小がありますが、通常、群を作って行動することが多いです。

カンムリカイツブリ　L：56cm　冬鳥

我が国では、最大のカイツブリです。
通常、写真のような冬羽で、頭上の黒い冠羽も短かく、顔の飾り羽も無く、頸の後ろから背中にかけては黒褐色で、顔から体の下側は白色です。3月の末頃には、冠が伸び、顔と頸に赤と羽の姿も見られます。
通常、沖合にいますが、岸辺近くで潜水して、採餌しているのもよく見かけます。

カイツブリ　L：26cm　留鳥

我が国で最小のカイツブリで、顔から頸の上部が赤褐色で目が黄色、嘴の付け根に黄白色の部位があり、その他は概ね灰褐色です。「キュルルルル」と良くとおる声で鳴き、潜水が得意です。葦などの間に浮巣を作って繁殖しますが、写真のように、ヒナを背中に乗せていることもよくあります。

ガン・カモの仲間

オオハクチョウ　L：140cm　冬鳥

阿見町では、外来種のコブハクチョウの他はコハクチョウが主体で、オオハクチョウを見ることは稀です。
両種を見分けるのは嘴の黄色い模様です。オオハクチョウは、この黄色い部分の先端がとがっていて嘴の半ば以上まで伸びて、嘴は黄色いイメージです。

コハクチョウ　L：132cm　冬鳥

コハクチョウは、オオハクチョウより一まわり小さく、嘴の黄色い部分が、写真のように嘴の根元近くで切れたようになっていて、嘴は、黒いイメージです。
なお、阿見町では、コハクチョウが岸の一部をねぐらにしていますが、昼間見ることが出来るのは、それほど多くありません。

マガモ　L：59cm　冬鳥

淡水ガモの代表で、光沢のあるグリーンの頭部と、黄色い嘴、そして茶色の胸の色が、特徴です。遠方に居ても、この色彩がよく目立ち、識別が容易で、霞ヶ浦に沢山渡って来るカモ中で、最も見る機会の多いカモでしょう。

カルガモ　L：60.5cm　留鳥

唯一、年中普通に見られる淡水ガモで、初夏にはヒナを連れた家族群を見かけます。また、オスとメスが同色の唯一のカモで、顔から頸にかけては淡褐色で全身が暗褐色、嘴は黒く、先端が黄色いところが目立ちます。

オナガガモ　L：75cm　冬鳥

他に比べて体長が長いスマートな淡水ガモです。頭部と後頸部は黒褐色、頸と胸は白色、背と脇は灰色で下腹部に薄い黄色の斑紋があります。嘴は黒く、両側は青灰色をしています。逆立ちをして、採餌します。

ハシビロガモ　L：50cm　冬鳥

名前の通り、ショベルのように平たい大きな嘴をしていて、頭部の緑色に光る黒、頸から胸の白、脇と腹の茶が目立ちます。数羽の群れで水面をぐるぐる回りながら、大きな嘴で掬うようにして、餌を採っています。

オカヨシガモ　L：50cm　冬鳥

淡水ガモの一種で、他のカモと違い、嘴と尾部が黒い他は、全体が灰褐色です。特に、胸から脇にかけて、灰色と黒褐色の鱗模様が、脇のほうでは、徐々に細かい縞模となり、上品さをかもし出しています。

ヒドリガモ　L：48.5cm　冬鳥

中型の淡水ガモで、頭から頸、胸にかけて茶褐色で、額から頭頂にかけてクリーム色の部分が目立ちます。体の上面と脇は灰色で、尾部は黒色です。他のカモと違い、陸に上がってよく草などを食べています。

ヨシガモ　L：48cm　冬鳥

中型の淡水ガモで、頭部の形がナポレオンの帽子のように見えます。頭頂部から顔の前面は赤紫色、眼から後頭部は緑色に光っています。喉と胸と尾の両側は白く、体側は黒の鱗状の細かい縞模様です。

コガモ　L：37.5cm　冬鳥

我が国で見られる最小級の淡水ガモです。頭部が栗色、眼の周りから後頸にかけて緑色、尾部の三角の黄色斑が目立ちます。これを「黄色いパンツ」と覚える手もあります。岸辺の葦原に隠れていることが多いです。

トモエガモ　L：40cm　冬鳥

コガモより少しだけ大きい淡水ガモです。顔に緑黒色と黄白色の巴形の模様があるのが特徴で、この模様を見れば、多種と間違えることはないでしょう。霞ヶ浦では、たまに極少数が飛来し、絶滅危惧種に指定されています。

キンクロハジロ　L：43.5cm　冬鳥

脇の白色以外は、全身が黒色です。頭部は紫がかった艶があり、後頭部に羽冠が垂れ下がっています。嘴は青灰色で先端は黒色です。メスは、全身が黒褐色をしています。海ガモなのでよく潜水をして採餌します。

ホシハジロ　L：45.5cm　冬鳥

中型の海ガモで、よく小群で行動しています。オスは、頭部と頸の赤褐色、胸の黒色、胴の灰色のはっきりした配色ですが、メスは、頭、胴体は灰褐色の単調な色をしています。よく潜水して採餌しています。

ミコアイサ　L：42cm　冬鳥

日本に生息するアイサの中で、最小です。オスは全身が白色と言ってよいほどですが、背中が黒く、後頭部などに黒い模様があり、特に目の周りの黒いところがパンダを思わせます。メスは、頭が茶褐色で、他は灰色です。

猛禽類

トビ　L：♂59cm、♀69cm　留鳥

最も身近で、おなじみの鷹で、「ピィヒョロロ」と鳴きながら、よく、輪を描いて飛んでいます。写真は、若鳥で全身に白い羽縁が目立ちますが、成鳥は全身が濃褐色になります。
最大の特徴は、我が国の夕力の仲間で唯一、凹尾であることで、写真のように、尾の中央が窪んでいることです。

ノスリ　L：♂52cm、♀57cm　冬鳥

カラスほどの大きさの鷹で、農耕地や市街地でも比較的よく見られます。
背面は黒褐色で、淡褐色の羽縁があります。下面は、淡褐色で、下腹部には黒褐色の模様があり、腹巻をしているように見えます。飛んでいるときは、淡横褐色の中に両翼の肩の部分と脇から腹にかけての黒褐色の部分が目立ちます。

サシバ　L：♂47cm、♀51cm　夏鳥

上面は茶褐色、下面は白地に密度の濃い茶褐色の横縞があり、白い喉の中央に黒褐色の縦線があり、「ピックイーィ」と鳴きます。
日本列島沿いに長距離の渡りをし、10月の初めには、所謂、鷹柱を作って渡ることで有名です。この時期、阿見町でも、小規模な鷹柱を見ることがあります。ただ、最近急激に数を減らし、絶滅危惧種に指定されました。

オオタカ　L：♂50cm、♀57cm　留鳥

頭から尾にかけて、上面は暗青灰色で、下面は白地に黒くて細い横斑が一面にある、美しくて精悍な鷹です。
以前は絶滅危惧種に指定され、環境問題のシンボルとして有名でしたが、現在は準絶滅危惧種になりました。
阿見町では、霞ヶ浦湖岸で比較的その姿を見る機会は、多いようです。

ハヤブサ　L：♂41cm、♀49cm　留鳥

頭部から背、翼、尾にかけて暗青灰色で頭部は黒味が強く、顔には髭状の黒斑が目立ちます。下面は白く、腹部はやや黄褐色味を帯び、胸から腹部に黒褐色の斑点があります。ハヤブサの仲間は、写真のように翼が細く先は尖っています。鳥の中で最も飛ぶ速度が速く、水平で時速100ｋｍ前後、急降下の場合は、390ｋｍに及ぶと言われています。

チョウゲンボウ　L：♂33cm、♀39cm　留鳥

ハヤブサの仲間で、ひとまわり小型の鳥です。体形や飛翔形は、ハヤブサとほとんど同じで、小さいだけですが、オスの頭部は灰色、翼は茶褐色をしています。メスは灰色の部分はなく、全身が茶褐色をしています。霞ヶ浦湖畔の水田や耕作地で、電柱にとまり、獲物を狙っている姿をよく見ることがあります。

ミサゴ　L：♂58cm、♀60cm　留鳥

トビ位の大きさで、頭頂部と体下面が白く、過眼線、体の上面及び胸の一部が黒褐色です。魚を主食とし、ホバリングをしながら狙いを定め、水中にダイビングして魚を捕えます。阿見町では、霞ヶ浦湖畔に行けば、沖の杭に止まったり、捕らえた魚を杭上で啄んだり、上空を飛ぶ姿を容易に観ることができます。

フクロウ　L：50cm　留鳥

頭部は丸く、羽角（角のような羽毛）はありません。全身が、灰褐色の地に茶褐色、黒褐色などの斑紋があり、下面には同様の縦斑があります。
フクロウは、大木のある暗い森で生息するものと考えられますが、写真のように真昼間、太陽の下に身をさらすこともあるようです。

バードウォッチング

阿見町は、霞ヶ浦に面し、湖岸や稲敷台地上に、水田、畑、平地林、集落などが散在する自然の豊かな町で、これまでに165種の野鳥の生息が確認されています。

阿見町では、どこで何をしていても、日々の生活の中で「バードウォッチング」を十分楽しむことができるのです。

特にお勧めの場所は、霞ヶ浦の湖畔や総合運動公園などですが、人の少ない谷津田の斜面林なども穴場で、季節ごとに様々な野鳥を見ることができます。

鳥の活動は朝が早いので、「バードウォッチング」は、早朝から出かけるのがコツです。半日でも野外を歩き廻れば、通常、20～30種の野鳥に出会えるでしょう。

また、自然観察会や野鳥の会の探鳥会などに参加すれば、鳥の鳴き声や行動の特徴など、様々なことを学べます。

この際、双眼鏡（8倍ぐらい）と、鳥の名前などを知るための簡単な鳥類図鑑（日本野鳥の会編：『山野の鳥』、『水辺の鳥』）などがあれば、その楽しさは何倍にもなります。野鳥は、肉眼で見るのに比べて、双眼鏡を使うと、細かい模様等もよく見えて驚くほど美しく、また、野鳥を見つけるのにも、大変便利です。

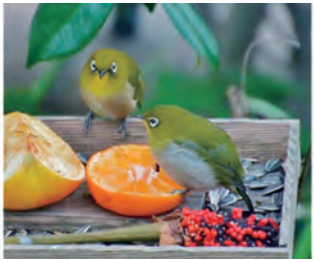
さらに、自宅の庭などの身近なところでも、バードウォッチングを大いに楽しむことができます。鳥には水浴びが欠かせないのですが、庭に植木鉢の皿などで浅い水場を作ったり、餌台にミカンやリンゴ、ヒマワリの種、バードケーキ（小麦粉、ラード、砂糖を2：1：1の割合で練って団子状にしたもの）などを置いてやれば、スズメ、メジロ、シジュウカラ、ヤマガラ、ヒヨドリ、キジバト、ジョウビタキ、シメ、ツグミ、シロハラ等、様々な野鳥がやって来て、居ながらにしてバードウォッチングを楽しむことができます。

また、巣箱をかけてやれば、シジュウカラやスズメが子育てをする様子を見ることもでき、正に、毎日の生活を野鳥と共にするという楽しさを味わうことができます。

このような楽しみを、一人でも多くの人に体験してもらい、自然環境にやさしい目を向けて頂きたいと思っています。

（久留島　昭彦）

巣箱生れのシジュウカラの雛



餌台に来たメジロ

ジョウビタキ（メス）の水浴び

阿見町鳥類目録

（令和2年2月15日現在　165種）

一連番号	科　名	種　名	国RL	県RDB
1	キジ	キジ		
2	カモ	コハクチョウ		
3		オオハクチョウ		
4		オシドリ	DD	準
5		オカヨシガモ		
6		ヨシガモ		
7		ヒドリガモ		
8		アメリカヒドリ		
9		マガモ		
10		カルガモ		
11		ハシビロガモ		
12		オナガガモ		
13		シマアジ		
14		トモエガモ	Ⅱ	Ⅱ
15		コガモ		
16		ホシハジロ		
17		キンクロハジロ		
18		スズガモ		
19		ホオジロガモ		
20		ミコアイサ		
21		カワアイサ		準
22		ウミアイサ		
23	カイツブリ	カイツブリ		準
24		カンムリカイツブリ		
25		ミミカイツブリ		
26		ハジロカイツブリ		
27	ハト	キジバト		
28		アオバト		
29	ウ	カワウ		
30	サギ	ヨシゴイ	準	Ⅱ
31		ゴイサギ		
32		アカガシラサギ		
33		アマサギ		Ⅱ
34		アオサギ		
35		ダイサギ		
36		チュウサギ		
37		コサギ		
38	クイナ	クイナ		
39		ヒクイナ	準	1A
40		バン		
41		オオバン		
42	カッコウ	ホトトギス		
43		ツツドリ		
44	アマツバメ	アマツバメ		
45	チドリ	タゲリ		
46		ケリ	DD	準
47		ムナグロ		
48		イカルチドリ		Ⅱ
49		コチドリ		
50		シロチドリ	Ⅱ	Ⅱ
51		オオメダイチドリ		
52	セイタカシギ	セイタカシギ	Ⅱ	Ⅱ
53	シギ	アオシギ		準
54		オオジシギ	準	1A
55		タシギ		
56		チュウシャクシギ		
57		アカアシシギ	Ⅱ	Ⅱ
58		コアオアシシギ		
59		アオアシシギ		
60		クサシギ		
61		タカブシギ		
62		キアシシギ		
63		ソリハシシギ		
64		イソシギ		
65		キョウジョシギ		
66		オバシギ		
67		トウネン		
68		オジロトウネン		
69		ヒバリシギ		
70		ウズラシギ		
71		ハマシギ	準	準
72		アカエリヒレアシシギ		
73	タマシギ	タマシギ	Ⅱ	1B
74	カモメ	ユリカモメ		
75		ウミネコ		
76		カモメ		
77		シロカモメ		
78		セグロカモメ		
79		コアジサシ	Ⅱ	Ⅱ
80		アジサシ		
81		クロハラアジサシ		
82	ミサゴ	ミサゴ		
83	タカ	トビ		
84		チュウヒ	ⅠB	ⅠB
85		ツミ		
86		ハイタカ	準	注
87		オオタカ	準	準
88		サシバ	Ⅱ	Ⅱ
89		ノスリ		

（ちなみに、日本鳥類目録（改定第７版）は633種、茨城県では400種余が記録）

一連番号	科　名	種　名	国ＲＬ	県ＲＤＢ
90	フクロウ	フクロウ		
91		アオバズク		１Ｂ
92		コミミズク		
93	カワセミ	カワセミ		
94	キツツキ	アリスイ		注
95		コゲラ		
96		オオアカゲラ		Ⅱ
97		アカゲラ		
98	ハヤブサ	チョウゲンボウ		
99		コチョウゲンボウ		
100		ハヤブサ	Ⅱ	Ⅱ
101	カササギヒタキ	サンコウチョウ		
102	モズ	モズ		
103	カラス	カケス		
104		オナガ		
105		ミヤマガラス		
106		ハシボソガラス		
107		ハシブトガラス		
108	キクイタダキ	キクイタダキ		
109	ツリスガラ	ツリスガラ		
110	シジュウカラ	ヤマガラ		
111		ヒガラ		
112		シジュウカラ		
113	ヒバリ	ヒバリ		
114	ツバメ	ショウドウツバメ		
115		ツバメ		
116		イワツバメ		
117	ヒヨドリ	ヒヨドリ		
118	ウグイス	ウグイス		
119	エナガ	エナガ		
120	ムシクイ	センダイムシクイ		
121	メジロ	メジロ		
122	センニュウ	オオセッカ	ＩＢ	ＩＢ
123	ヨシキリ	オオヨシキリ		
124		コヨシキリ		ＩＢ
125	セッカ	セッカ		
126	レンジャク	ヒレンジャク		
127	ミソサザイ	ミソサザイ		
128	ムクドリ	ムクドリ		
129	ヒタキ	トラツグミ		
130		シロハラ		
131		アカハラ		
132		ツグミ		
133		ノゴマ		
134		ルリビタキ		
135		ジョウビタキ		
136		ノビタキ		
137		イソヒヨドリ		
138		エゾビタキ		
139		コサメビタキ		注
140		キビタキ		
141		オオルリ		
142	スズメ	スズメ		
143	セキレイ	キセキレイ		
144		ハクセキレイ		
145		セグロセキレイ		
146		ビンズイ		
147		タヒバリ		
148	アトリ	アトリ		
149		カワラヒワ		
150		マヒワ		
151		ベニマシコ		
152		ウソ		
153		シメ		
154	ホオジロ	ホオジロ		
155		ホオアカ		ＩＢ
156		カシラダカ		
157		ミヤマホオジロ		
158		アオジ		
159		クロジ		
160		コジュリン	Ⅱ	Ⅱ
161		オオジュリン		

外　来　種				
1	キジ	コジュケイ		
2	カモ	コブハクチョウ		
3	ハト	カワラバト（ドバト）		
4	チメドリ	ソウシチョウ		

【註１】　国ＲＬ：環境省レッドリスト
（ＩＢ：絶滅危惧種ＩＢ類、Ⅱ：絶滅危惧種Ⅱ類、準：準絶滅危惧種、ＤＤ：情報不足）

【註２】　県ＲＤＢ：茨城県レッドデータブック
（ＩＡ、ＩＢ、Ⅱ：絶滅危惧種１Ａ類、同１Ｂ類、同Ⅱ類、準：準絶滅危惧種、注：情報不足）

2．魚たち

― 図鑑担当：吉田　幸二 ―

霞ヶ浦湖岸の阿見町には多くの魚が棲息しています。霞ヶ浦に棲息している魚種は70種とも言われておりますが、実際に魚釣りで釣ったり、手網で取ったりしてもそれほどの種類は捕れないでしょう。

そこで、ここでは釣りの時に釣れたり、手網でガサガサをやったりしたら捕れる様な魚たちを紹介します。今から50年ほど前の霞ヶ浦にはいなかった魚も入っていますが、それらの魚たちを含めて霞ヶ浦の魚として可愛がってください。

時代の変化や環境の変化で、棲息する魚類も年々変わっています。が、これらの変化は人間社会の変化に伴っていることをしっかりと認識し、無暗に殺さないことを実践して欲しいです。万が一殺すのであれば、それらを食べたりして有効利用して欲しいです。生物は資源ですから！

ワカサギ

シラウオ

霞ヶ浦の魚

コイ

放流により日本全国に分布している。霞ヶ浦でも淡水化され、コイの放流が行われてから霞ヶ浦の優占種となった。雑食性で何でもよく食う。産卵期は4月から6月である。1mを超えるほど巨大に育つものも霞ヶ浦には多く棲息している。

ブラックバス

大正14年に赤星鉄馬氏によって日本に移入され、その後の釣りブームで各地に棲息するようになった。肉食性で昆虫から爬虫類まで食べるために、ルアー釣り愛好者に好まれるターゲットになっている。

ギンブナ

水の汚れに強く、青みを帯びた銀色の体色からこう呼ばれる。ほとんどが雌で卵は他魚の刺激を受けて単為発生する。キンブナよりも大型化し、30cmを超えるものも少なくない。霞ヶ浦周辺にある堤脚水路で一年中釣れる。

ボラ

ほぼ世界中に分布していて、春にかけて3cmほどの幼魚が川を上る。30cmほどのものをボラと呼び、それよりも小さいものはイナ、大きいものはトドと呼ぶ。「とどのつまり」の語源である。

ニゴイ

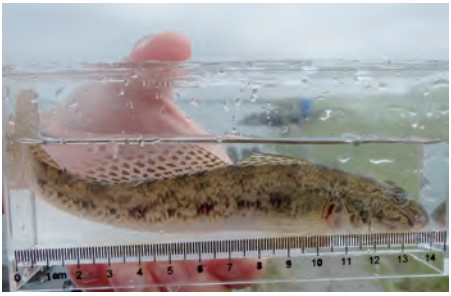
コイに似ているので似鯉（ニゴイ）と呼ばれている。大型のものは肉食性が強く、ルアーの対象魚でもある。繁殖期は４月から７月で砂礫底に産卵をする。また、産卵期には河川を登ってゆく姿を多く目撃できる。

ハクレン

1943年頃から食料としてソウギョなど共に中国から移入された。成長は早く、５年ほどでメーター級に育つ。食性は通常は植物プランクトンではあるが、大型化したものは稀にルアーに掛かることがある。

ツチフキ

水底を這いながら餌を求めて移動する。底棲生物を好んで食べる。カマツカによく似ているが、ツチフキの方が丸みを帯びている。産卵期は４月から６月の頃で、産卵された卵はオスが守る。



マハゼ

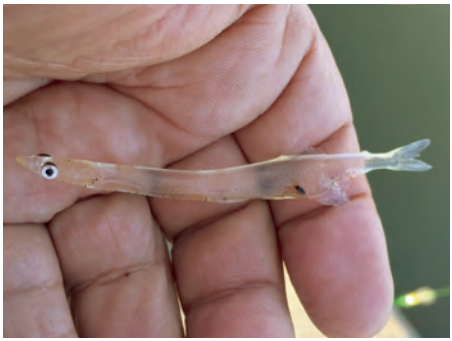
利根川のハゼが有名であるが、霞ヶ浦でも稀に大型のハゼが捕獲できる。常陸川水門に魚道が設置されてからは、遡上率が上がったようである。早春や初秋の時期に、流入河川の河口域で期待できる。

ライギョ

ライギョにはカムルチーとライヒーがいて、カムルチーの方が大型化する。霞ヶ浦には両者が棲息していて、石積み堤が出来てからは棲息数が増えた。食性は肉食で魚はもとより、カエル、ネズミ、小型の鳥など動くものはなんでも食す。

スズキ

海の魚のイメージが強いが、淡水域にも入り込んでくる。特に、常陸川水門に魚道が設置された以降、釣れる率が高まっている。利根川では鬼怒川の合流点付近、那珂川では御前山の辺りでも釣れることから淡水域でも十分に生きていられる。



シラウオ

生きているときは透明であるが、死ぬと体色が真っ白に変色するためこう呼ばれている。早春の産卵期には、大群で河川を遡上して行く。食性は動物プランクトンで、体側には黒点が入っている。ブラックバスやアメリカナマズの他、コイ科の魚の餌にもなっている。

タイリクバラタナゴ

ソウギョの移入に混じって中国から来た魚で、体色にバラのような赤色を発するためにバラタナゴと呼ばれる。また、釣り人の間ではその体高の高さからオカメなどとも呼ばれている。産卵期は春から秋までと長期間に及ぶ。

タモロコ

ホンモロコとよく間違えられるがこちらはタモロコ。ホンモロコよりも全体に丸みを帯びている。雑食で何でも良く食べる。春から初夏にかけての時期が繁殖期である。数年前に、このタモロコが霞ヶ浦で増えたが、その後安定した模様である。

タウナギ

ウナギと言う名がつくが、ウナギとは程遠い魚である。肺呼吸のため時折、水面に顔を出して空気を吸っている。肉食性でミミズからヒル、エビ類まで何でも食べる。田圃の畔に穴を開けるので農家からは嫌われているが、中国や韓国では食料として好まれている。

ワカサギ

ワカサギと言うと氷上の穴釣りを想像する人が多いだろうが、霞ヶ浦の代表的な魚でもある。実は近隣の湖沼に棲息しているワカサギの生まれ故郷の多くが霞ヶ浦なのである。食性は動物プランクトンで、1年で成熟し産卵をして一生を終える。

ブルーギル

1960年に上皇様がアメリカから持ち帰ったものが各地の水産試験場に下賜され、全国に広まった。繁殖力が旺盛で生き物だけではなく、魚の卵や貝なども食べる。繁殖期は6月から7月で、団地のように数匹が固まって産卵床作る。

ウグイ

鵜が好んで食う魚と言うことで、ウグイと命名されたらしいが定かではない。霞ヶ浦に棲息しているものはマルタウグイと呼ばれる種で50cmほどまで成長する。汽水域に棲み川を上って産卵をする。産卵期は春から初夏にかけての時期で底石の間に産卵する。

ウキゴリ

ハゼ類の多くは肉食性で、攻撃的な気性の荒さもある。名前の通り稚魚の時期は群れて浮いている。成魚の体長は10cm程度であるが、霞ヶ浦では15cm近くまで成長するものもいる。霞ヶ浦の本湖ではヌマチチブ、堤脚水路ではウキゴリ、こんな釣りが楽しめる。

甲殻類

ザリガニ

アメリカから1916年にウシガエルの餌として持ち込まれたものが全国に広まった。雑食性のために稲を食害したり、田圃の畔に穴を開けたりして、農家の嫌われものである。その一方でサキイカなどの餌で手軽に釣れるので、子どもたちの釣り入門になっている。

ミナミヌマエビ

元々は西日本が生息域であったが、各種の魚の放流に混じって東日本にも分布した。淡水域で一生を過ごす。コイやフナ、ブラックバス、ブルーギルの好餌である。霞ヶ浦では、背中に緑色の帯を呈した種が多い。

スジエビ

通常エビと言うと、このスジエビのことを指す。頭部から腹部にかけて7本の黒い筋模様を持ち、雑食性で初夏から晩夏に産卵する。テナガエビのように第一胸足と第二胸足にはさみがあるが短い。川エビのかき揚げが美味い。

ヨコエビ

エビと言う名がついてはいるが、どちらかと言うとワラジムシやダンゴムシに近い生物である。その名の通り、横になって移動する。ヨコエビは落ち葉や他の生物の食べかすなどを餌にする水底の掃除屋である。また、魚たちの格好の餌にもなっている。

貝類

マシジミ

淡水域に棲息しているものがマシジミで、汽水域に棲息しているのがヤマトシジミである。霞ヶ浦にはマシジミが棲息している。殻長は4cmほどまで成長する。幼貝は茶褐色だが成長すると黒ずんでくる。小型の割に水質浄化能力が高い。

ドブガイ

ヌマガイなどとも呼ばれるイシガイ科の二枚貝。タナゴの産卵床となるため、この貝が減少するとタナゴも減少する。年間通じて幼生を放出する多産方の二枚貝である。将来的にこの貝の増加によって、水質浄化とタナゴやヒガイなどの二枚貝を産卵床とする魚が増える。

川の魚

マルタニシ

水田や池沼で見られる普通のタニシである。雌雄同体の胎生で梅雨から夏にかけて卵を産む。絶滅危惧種でもある。減少したのは圃場整備と農薬によるものと考えられている。寄生虫がいるので生食は危険であるが、味噌汁にしたり、煮物にすると美味い。

メダカ

田んぼの周りにいる最も身近だった魚の1つ。体長3.5cmほどの小型の魚で、田んぼや周囲の水路で群れをなして泳ぐ姿が見られます。水路のコンクリート化などの基盤整備で数を減らし、環境省のレッドリストで絶滅危惧種に指定されています。

ホトケドジョウ

全長8cmほどのドジョウの一種。湧き水が流れる小さな水路で見られます。阿見町では谷津田の源流域をすみかにしていますが、開発や基盤整備で数を減らしています。環境省のレッドリストで絶滅危惧種に指定されています。

ドジョウ

メダカと並んで、田んぼを代表する魚です。大きくなると15cmほどになります。阿見町では谷津田の田んぼと水路を中心に広く見られます。かつて農村地帯では、食用として重要な魚でした。環境省のレッドリストで準絶滅危惧種に指定されています。

3．虫たち

ー 図鑑担当：大森　はるみ ー
監修　筑波山ネイチャーガイド
松田　浩二 氏
一部写真提供　久留島　昭彦

阿見町では2011年、2012年に行われた環境調査及びその後2019年までの調査により、昆虫約460種、クモ約67種が確認されています。（水生昆虫は調査できていません）

最近では阿見町でも日本の温暖な地域に生息していた南方系の昆虫の存在が多く確認されるようになり、地球温暖化による影響を強く感じます。

町内で見られる南方系の昆虫を一部紹介すると、チョウではアオスジアゲハ、ツマグロヒョウモン、メスグロヒョウモン、ナガサキアゲハ、クロコノマチョウ。カメムシの仲間のヨコヅナサシガメ。コガネムシの仲間のアオドウガネなどもよく見かけます。夏に姿は確認できていないがクマゼミの鳴き声は聞こえはじめました。

また町内に生息している外来種の昆虫ではアオマツムシ、アワダチソウグンバイ、セイタカアワダチソウヒゲナガアブラムシ、アメリカミズアブ、チョウのアカボシゴマダラ、要注意の幼虫が毒針毛を持つヒロヘリアオイラガなどが確認されています。

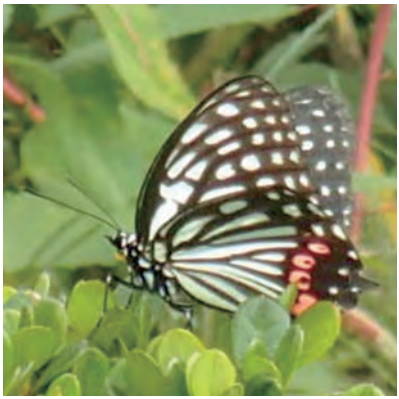
環境の変化により虫たちの世界にも大きな変化が起きています。温暖化による影響だけでなく、開発により虫たちの生息場所が失われてきている現実にも目を向けてみてください。

アカボシゴマダラ（特定外来生物）現れる！

アカボシゴマダラは外来種のチョウです。1997年に神奈川県で発見され、その後各地で目撃されています。2013年には茨城県にはいなかったチョウです。

在来種のゴマダラチョウやオオムラサキと同様に幼虫はエノキの葉を食べます。また、繁殖率が高いので在来のチョウの生息が脅かされると危惧されています。

阿見町では上長、実穀、小池、南平台で生息が確認されています。



アカボシゴマダラ

チョウ

キアゲハ

大きさ　70～90mm　　時期　4～10月
生息地　街中から山地の明るい草地
幼虫の食草　セリ科（セリ、パセリ、人参など）
町内で普通に見られる。

ナガサキアゲハ

大きさ　90～120mm　　時期　4～10月
生息地　平地から山地
幼虫の食草　ミカン科
南方系のチョウだが関東地方にも分布。

ツマグロヒョウモン

大きさ　60～70mm　　時期　4～11月
生息地　街中から山地
幼虫の食草　スミレ科
南方系のチョウだが北に分布を拡大。
毒のあるカバマダラに擬態。

ルリタテハ

大きさ　50～65mm　　時期　3～11月
生息地　街中から山地の樹林周辺
幼虫の食草　サルトリイバラ、ヤマユリなど
成虫は花の蜜や樹液を好む。

ジャノメチョウ

大きさ　50～65mm　　時期　6～9月
生息地　平地から低山地の明るい草地
幼虫の食草　イネ科　（ススキなど）
黒い蛇の目紋の中心は青色。
成虫は花の蜜や人汗にも集まる。

ベニシジミ

大きさ　25～35mm　　時期　4～11月
生息地　街中から山地の草地
幼虫の食草　タデ科（スイバ、ギシギシなど）
町内で普通に見られるシジミチョウ。

ウラナミアカシジミ

大きさ　40～45mm　　時期　6～7月
生息地　街中から山地の樹林
幼虫の食草　ブナ科　（コナラ、クヌギなど）
町内では珍しいチョウ。夕方活動する。

ダイミョウセセリ

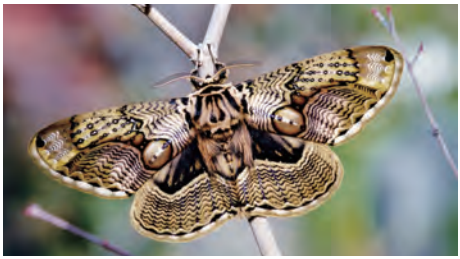
大きさ　30～40mm　　時期　4～10月
生息地　平地から山地の樹林の林縁
幼虫の食草　ヤマノイモ科　（ヤマノイモなど）
翅の黒地に白い紋が正装の羽織に見える。

カノコガ

大きさ　30～37mm　　時期　6～9月
生息地　平地から山地
幼虫の食草　タンポポ、ギシギシなど
翅が鹿の子模様。ハチに擬態している。

ユウマダラエダシャク

大きさ　40～50mm　　時期　5～10月
生息地　平地から山地
幼虫の食草　マサキなど
夜行性。翅や体が鳥の糞に擬態。



イボタガ

大きさ　91～94mm　　時期　3～6月
生息地　平地から山地
幼虫の食草　イボタノキ、キンモクセイなど
大きな目玉模様と波型紋が特徴。
日本固有種

モモブトスカシバ

大きさ　23～25mm　　時期　6～8月
生息地　平地から山地
幼虫の食草　カラスウリやアマチャヅル
茎に虫こぶを作り内部を食す。

トンボ

アオモンイトトンボ

大きさ　30～35mm　　時期　6～9月
生息地　平地の池沼、水田
雌は雄と同色したタイプと褐色をしたタイプがある。

オオシオカラトンボ

大きさ　51～61mm　　時期　5～11月
生息地　平地から低山地の池沼、小河川
未熟な雄と雌の体色は黄色に黒い斑紋があり、成熟雄の体色は青っぽい白色。

ノシメトンボ

大きさ　37～52mm　　時期　6～11月
生息地　平地から低山地
成熟雄の後部背面は暗赤色になる。

チョウトンボ

大きさ　37～52mm　　時期　6～11月
生息地　平地から丘陵地の池、沼
チョウのようにヒラヒラと飛ぶ

アキアカネ

大きさ　31～46mm　　時期　6～12月
生息地　平地から丘陵地の池沼、水田
夏の間は高地で避暑し秋に里に降りてくる。
成熟すると頭部を除き体が真っ赤になる。

オニヤンマ

大きさ　90～114mm　　時期　6～10月
生息地　平地から山地の水辺
日本最大のトンボで、成虫になるまでに2～3年かかる。

甲虫

ナミテントウと幼虫

大きさ　7～8mm　　時期　3～11月
エサ　成虫、幼虫共にアブラムシ
翅の色や斑紋は変化が多い。
温暖化で関東地方では二紋型が多くなった。

トホシテントウ

大きさ　6～9mm　　時期　6～10月
エサ　アマチャヅル、カラスウリ
林の周りで見られる。
翅の黒い斑紋が10個付く。

コアオハナムグリ

大きさ　11～16mm　　時期　4～10月
エサ　花粉
林縁、庭や公園で見られる
卵から成虫になるのに1～2年かかる。

マメコガネ

大きさ　9～13mm　　時期　5～9月
エサ　色々な植物の葉
大豆やブドウなどの農作物を食すので害虫とされる。

ヤマトタマムシ

大きさ　30～40mm　　時期　6～8月
エサ　成虫はサクラ、エノキ、ケヤキの葉
　　幼虫は朽木
雑木林やその周辺で見られる。

マメハンミョウ

大きさ　12～20mm　　時期　6～10月
エサ　成虫はマメ科、ナス科の葉
　　幼虫はバッタやイナゴの卵
体内に毒を持つ。

オオヒラタシデムシ

大きさ　23mm 前後　　時期　4～ 10月
エサ　成虫、幼虫共に動物の死骸
林内、公園、庭などで見れれる。
地表を徘徊しほとんど飛ばない。

カブトムシ

大きさ　30 ～ 55mm　　時期　6～9月
エサ　成虫は樹液や腐った果実
　　幼虫は朽木や堆肥
森や林内に生息。夜間に活動する。

アカガネサルハムシ

大きさ　7mm　　時期　5～8月
エサ　ブドウ、エビヅル、ハッカなどの葉
林内、公園、庭などで見られる。
雑木林周辺や畑で見られる美しいハムシ。

クロウリハムシ

大きさ　14 ～ 18mm　　時期　4～8月
大きさ　6～7mm　　時期　5～ 10月
エサ　ウリ科やダイズの葉
野菜の害虫として有名。山地や畑で見られる。

イタドリハムシ

大きさ　7～9mm　　時期　3～ 10月
エサ　イタドリ、ギシギシなどの葉
草地、畑、林縁で見られる。

ジンガサハムシ

大きさ　9mm　　時期　5～8月
エサ　ヒルガオの葉
草地や林縁で見られる。
前翅の形が陣笠に似るのが名の由来。

ヨツスジハナカミキリ

大きさ　14～22mm　　時期　6～8月
エサ　リョウブやウツギの花
体の模様はハチに擬態している。
寄生樹はモミ、アカマツ、オニグルミ、コナラの腐枯材。

キボシカミキリ

大きさ　14～30mm　　時期　5～10月
エサ　成虫、幼中共にクワ科の樹木
触角が長く体長の2倍以上ある。
果樹の害虫。

ベニカミキリ

大きさ　13～17mm　　時期　4～8月
エサ　成虫は花粉や蜜
　　幼虫はタケ類の材
成虫になるのに3年かかる。

ラミーカミキリ

大きさ　8～14mm　　時期　5～8月
エサ　ハルニレ、カラムシ、ラミーなどの葉
江戸時代に中国から渡来した。

オオアオゾウムシ

大きさ　12～15mm　　時期　6～8月
エサ　ヤナギ類、ミズナラ、タデ類の葉
緑色の美しいゾウムシ。

オジロアシナガゾウムシ

大きさ　6mm前後　　時期　4～9月
エサ　クズの葉　幼虫はクズの茎に虫こぶ作りその茎を食べて育ち蛹になる
危険を感じると死んだふりをする。

カメムシ

アカスジキンカメムシと幼虫

大きさ　16～20mm　　時期　5～11月
エサ　フジ、ハゼノキ、コブシ、ミズキなどの汁
体の模様が人面に見える美しいカメムシ。幼虫は終齢幼虫で黒白模様。

ブチヒゲカメムシ

大きさ　13～18mm　　時期　4～11月
エサ　マメ科、キク科、イネ科の茎、実の汁
触角の黒白のブチ模様が名の由来。

ホオズキカメムシ

大きさ　13～18mm　　時期　4～11月
エサ　ナス科やヒルガオ科植物の汁
ナスやサツマイモの害虫。

エサキモンキツノカメムシ

大きさ　11～13mm　　時期　4～11月
エサ　ミズキ、ハゼノキ、サンショウの汁
背中にハート模様が特徴。産卵した卵や幼虫を守る習性がある。

ヨコズナサシガメと幼虫

大きさ　16～24mm　　時期　4～10月
エサ　他の昆虫
関東地方でも生息するようになった。羽化したばかりの幼虫は体色が赤い。

ナガメ

大きさ　7～10mm　　時期　4～10月
エサ　アブラナ科植物
アブラナ科の野菜の害虫。

ニイニイゼミ

大きさ　32～40mm　　時期　6～9月
エサ　サクラ、ミカン科、ビワなどの木の汁
幼虫は土中3年で過ごす。
「チ――」と鳴く。

アブラゼミ

大きさ　53～60mm　　時期　7～10月
エサ　バラ科のサクラなどの木の汁
幼虫は4～6年土中で過ごす。
「ジーーー」と鳴く。

ツマグロオオヨコバイ

大きさ　13mm　　時期　8～9月
エサ　色々な植物の汁
夕方から夜に活動する。
危険を感じると横歩きで逃げる。

ムネアカアワフキ

大きさ　4～5mm　　時期　4～6月
エサ　サクラ、ウメ、シャリンバイなどの汁
幼虫は枝先に泡巣をつくる、数日後巣は
石灰化して巻貝状の巣となる。

その他

ニホントビナナフシ

大きさ　50mm　　時期　7～10月
エサ　樹木の葉
翅があり飛ぶことができるナナフシ。雄が
いないとされているので単為生殖する。

ヤマトシリアゲ

大きさ　13～20mm　　時期 4～9月
エサ　他の昆虫
腹端を持ち上げて止まる。雌に食べ物を届け
それを食べている間に交尾する習性がある。

ハエ

ナミハナアブ

大きさ　14～16mm　　時期　4～12月
エサ　花の蜜や花粉
ハチに似ていてポピュラーなハナアブ。
ハナアブの仲間は花粉の媒介をしてくれる。

オオハナアブ

大きさ　14～16mm　　時期　4～12月
エサ　花の蜜や花粉
ハチに似ているが複眼が大きいので区別できる。

キゴシハナアブ

大きさ　9～13mm　　時期　4～10月
エサ　花の蜜や花粉
複眼が黄色っぽい。

ツマグロキンバエ

大きさ　5～7mm　　時期　6～10月
エサ　花の蜜
翅の先が黒いのが名の由来。

ヨコジマオオハリバエ

大きさ　13～19mm　　時期　6～10月
エサ　花の蜜
雌は腹の中で卵を育て幼虫を産む。

マダラガガンボ

大きさ　30～40mm　　時期　4～7月
エサ　幼虫は水中の腐食物
ガガンボの仲間で最大級の大きさ。

ハチ

トラマルハナバチ

大きさ　12～20mm　　時期　4～10月
エサ　花の蜜、花粉
体は毛が多く花粉が付きやすく花粉媒介に役立っている。

クマバチ（キムネクマバチ）

大きさ　20～24mm　　時期　4～10月
エサ　花の蜜、花粉
木の洞などに巣を作る。「ブンブン」と翅音を立て飛び回る。ひとを刺すことはない。

バッタ

エンマコオロギ

大きさ 29～35mm　　時期　8～11月
エサ　植物や小昆虫
大型のコオロギ、「コロコロリー」と鳴く。

オンブバッタ

大きさ　♀42mm　♂27mm　　時期　8～10月
エサ　シソ、アサガオなど多種類の植物
雄は雌を確保するため雌の背中に乗っている。

コバネイナゴ

大きさ　♀40mm　♂30mm　　時期　7～11月
エサ　イネ科植物
稲の害虫。

トゲヒシバッタ

大きさ　16～20mm　　時期　3～11月
エサ　各種のコケ
湿った草地で見つかる。
胸の両側にトゲがあるヒシバッタ。

クモ

ジョロウグモ

大きさ　♀20～30mm　♂6～10mm
時期　9～11月
樹間に細かい三重の網を張り中央に止まり獲物を待つ。

ワキグロサツマノミダマシ

大きさ　♀8～10mm　♂7～8mm
時期　7～8月
昼間は葉裏に隠れ夕方から垂直円網を張る。

コガネグモ

大きさ　♀20～25mm　♂5～7mm　時期　5～9月
人家の周辺、水田、河原、草地など日当たりのよい樹間や草間に垂直円網を張る。現在、数が減り希少種になっている。

シロオビトリノフンダマシ

大きさ　♀7～8mm　♂2mm
時期　7～9月
昼間は葉裏に隠れ夜間に円心水平円網を張る。静止していると鳥の糞に見える。

キクヅキコモリグモ

大きさ　♀10～12mm　♂8～9mm
時期　7～10月
水田では害虫を捕食する。
菊月（9月頃）雌は子グモを背負っている。

アリグモ

大きさ　♀7～8mm　♂5～6mm
時期　6～8月
アリそっくりな体のハエトリグモの仲間。広葉樹の葉の上で見かけることが多い。

4．植物たち

― 図鑑担当：稲川　雅信 ―
写真提供　栗原　孝（アサマズケ）
渡辺　泰（センダイタイゲキ）

平成23年（2011年）5月から令和元年（2019年）10月に至るまで、阿見町全域の維管束植物（導管や篩管のある高等植物）の生息調査をしてきました。その結果、阿見町で1,175種の植物を確認しました。その内訳は、シダ植物92種、木本植物250種、草本植物833種でした。茨城県では約2,900種の植物が確認されていますが、その1／3以上の植物が阿見町に生息しているということです。

アワコガネギク

阿見町の花は菊、木はサクラ（国の花もキクとサクラです。）ですが、野生の菊にアワコガネギクというものがあります。右図のような黄色い小菊ですが、昔は、阿見町のどこにでもあったのですが、生活様式が変化するにつれ、どんどん少なくなり、今や、絶滅危惧種になってしまいました。サクラについては、ソメイヨシノは、花が木いっぱいに咲き、豪華で美しいですが、ヤマザクラは花と葉が同時に開き、花数もソメイヨシノと比べると、少ないですが、清楚で捨てがたく、阿見町でも多くの木が野生しています。

ヤマザクラ

茨城県の花は、バラ、木はウメですが、どちらもバラ科で、野生のバラ科の花で、春、真っ先に明るい黄色の花を咲かせるのがキジムシロです。名の由来は地面に広がって咲く姿を、キジの座るムシロにたとえたものです。阿見町でも、広く見られます。

キジムシロ

阿見町は、筑波山に近く、霞ヶ浦に接し、稲敷台地の特性をよく反映して、谷津田が発達しており、自然植生は、山地性や湿地性、森林性、草原性のほか、わずかながら、海岸性のものも含めて、意外なほど豊かなことがわかりました。ここでは、その代表的な植物102種を春から秋まで咲く花の順にお示しします。誌上で花散歩をお楽しみください。

なお、植物の分類は、現在、葉緑体の遺伝子情報による分類が広く用いられていますが、形態を無視したような分類も多々ありますので、ここでは、形態の違いに基く旧分類法を用いました。

春の花　●草原、畑地、林縁、路辺などの植物

アオイスミレ　スミレ科

和名は、丸い葉の形がフタバアオイに似ているからという。早春に咲く。全体に毛が多く、花冠は縦に長い。柱頭の先が曲がる。阿見町では1か所のみに生息。

アマナ　ユリ科

和名は、球根に甘みがあるからという。花がチューリップに似ているので、ジャパニーズチューリップともいう。阿見町ではまれに見られる。県絶滅危惧Ⅱ類

カントウタンポポ　キク科

右下図のガクのように見える総苞片に小さな突起があるのが特徴。春のみに咲く。以前は、関東地方に普通にあったが、今では、都会地ではほとんど見られない。でも、阿見町では、多くの所で見られる。

ノニガナ　キク科

和名は、ニガナに似ているからという。葉の基部の矢じり型が特徴。頭花はニガナより大きく舌状花が多数ある。阿見町では少ない。県準絶滅危惧

ヒメイズイ　ユリ科

普通、海岸近くの山地などに生息するが、阿見町の林縁などで、まれに見られる。アマドコロのミニチュア版、茎に稜もある。草丈低く、花数少ない。

ミヤコグサ　マメ科

黄花が目立つ。和名は、京都に多かったからという。花の形が貴族の烏帽子に似ることも、その理由か。茎が地を這って広がる。阿見町ではまれに見られる。

●田んぼ、霞ヶ浦畔、河川敷などの植物

クサスギカズラ　ユリ科

和名は、葉のように見える葉状枝がスギの葉に似ているからという。普通、海岸の砂地などに生息するが、阿見町では、日当たりのよい林縁の1カ所のみに生息。アスパラガスの仲間。雌雄異株、右上は雌花。

ノウルシ　トウダイグサ科

総苞が黄色に着色し、早春の枯野に目立つ。和名は、茎を傷つけるとウルシのような白い汁が出るからという。トウダイグサ属の花は杯状の独特の花序をもつ。霞ヶ浦湖岸にまばらに群生する。県国準絶滅危惧

アリアケスミレ　スミレ科

花の色は白からピンク、花弁に紫色の条が入る。側弁に毛あり（側弁の毛の有無は重要なスミレの分類項目）。葉は長三角形型。
阿見町では1か所のみに生息。県準絶滅危惧

アサマスゲ　カヤツリグサ科

茨城県以西の本州に分布する。スゲ属の花は単性で、雄小穂と雌小穂が分かれるものが多いが、本種は共存する。写真は雌性期のもの。阿見町では1か所のみに生息。県絶滅危惧ⅠB類　国準絶滅危惧

ヤナギトラノオ　サクラソウ科

山の湿地の植物だが、筑波山にもない。もっと深山の湿地に生息する。葉がやなぎに似ていて、花がトラノオの仲間ということ。短い虎の尾　阿見町では1ヶ所で群生。県絶滅危惧Ⅱ類

カキツバタ　アヤメ科

和名は、書付花から変わった。書付とは、染付けの意。カキツバタの特徴は、花弁の白いスジと葉の中脈が目立たないこと。阿見町ではまれに見られる。県絶滅危惧Ⅱ類　国準絶滅危惧

カワヂシャ　ゴマノハグサ科

クワガタソウ属の特徴の雄しべを2つ持つ小さな白花を多数つける。葉は対生、若葉は食べられる。阿見町では少ない。県国準絶滅危惧

ジョウロウスゲ　カヤツリグサ科

スゲの分類は難しいが、本種は分かり易い。楕円形の雌小穂が目立つ。上臈とは、身分の高い女官のこと。雌小穂を例えた。枠内は花　阿見町では所々で見られる。県準絶滅危惧　国絶滅危惧Ⅱ類

●森林内や林縁の植物

レンプクソウ　レンプクソウ科

和名は、この根がフクジュソウにつながっていたからという。頂部の花は4弁、側面の花は四方に1つずつあって、5弁という個性的な花序だが、緑色で目たたない。1属1種　阿見町では1か所のみに生息。

シュンラン　ラン科

ジジババ、ホクロともいう。農山村を代表する花。花のない場合、葉縁の鋭鋸歯が似た植物との相違点。色や形の変わり花が珍重される。シンビジウムの仲間　阿見町では所々で見られる。

イチリンソウ　キンポウゲ科

アネモネの仲間のうちで花が一番大きい。名の通り1つの茎に一輪のみ咲く。上木の葉が開く前に実を結び枯れるスプリングエフェメラル。阿見町では1か所のみに生息。県準絶滅危惧

ニリンソウ　キンポウゲ科

普通1つの茎に花を2輪つけるが、同時に咲くことはまれで、順番に咲く。葉に白い斑が入ることが多い。イチリンソウと同様、スプリングエフェメラルに数えられる。阿見町ではまれに見られる。

センダイタイゲキ　トウダイグサ科

タイゲキとは、トウダイグサ属の中国名。茨城県では一旦絶滅と思われていた。左上が芽生え、右上が花序、下がそのアップ。阿見町ではまれに見られる。県絶滅危惧ⅠA類　国準絶滅危惧

ヒトリシズカ　センリョウ科

十字対生の照葉の中心から、1本の清楚な花穂を伸ばすので、ヒトリシズカと。白く見えるのは雄しべの花糸で、花弁はない。阿見町ではまれに見られる。

キンラン　ラン科

林内の暗闇に目立つ。この写真ほど花が多くて艶やかな株は少ない。ランは菌根植物といって菌と共生していて、掘り取ってもなかなか根付かない。阿見町では比較的多い。県準絶滅危惧　国絶滅危惧Ⅱ類

ギンラン　ラン科

キンランより花は少し早い。花はほとんど開かず、キンランより地味。生息数は、キンラン同様、阿見町では比較的多い。県準絶滅危惧

ササバギンラン　ラン科

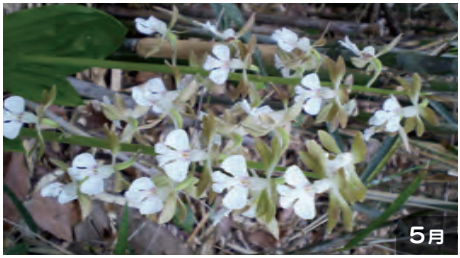
和名は、ギンランに似て、ササのような長い葉を有するからという。苞葉も、花序と同長以上で、ギンランと異なる。阿見町ではギンランより少ない。

タニギキョウ　キキョウ科

葉までの丈は5cmほど、かわいいキキョウ。山の谷にひっそりと、小さな白花が咲く。小さな丸い葉は、互生、やや長い柄をもつ。1茎に1花、5裂する。阿見町ではまれに見られる。

クマガイソウ　ラン科

クマガイソウを含むアツモリソウ属の唇弁は袋状になる。これを熊谷直実の母衣（ほろ）に例えたという。茎花柄に毛が多い。阿見町では1か所のみに生息。県絶滅危惧ⅠA類　国絶滅危惧Ⅱ類



エビネ　ラン科　（右方が上）

和名は、球根がエビに似ているからという。しわが入った薄い葉が2、3枚根生する。本種も昔はどこにもあったが、園芸用に盗掘され、激減した。阿見町では1か所のみに生息。県絶滅危惧Ⅱ類　国準絶滅危惧

ワニグチソウ　ユリ科

和名は、花を抱く苞葉がお寺にある鰐口に似ているからという。対の苞葉の中に、普通は2つの白い花がぶら下がってつく。葉は丸っぽい。群生することが多い。阿見町では比較的多い。

ギンリョウソウ　イチヤクソウ科

山地の日陰のやや湿ったところに生える。腐生植物で、葉なく光合成しない。菌根菌などから栄養をもらって咲く。栄養状態によるが、ほぼこの頃咲く。花の1部を除いてほとんど無色。阿見町ではまれに見られる。

夏の花　●草原、畑地、林縁、路辺などの植物

サイハイラン　ラン科　（右方が上）

和名は、花姿が戦場で指揮官が振る采配に似ているからという。山地の森林内に、ひっそりとたたずむ妖艶な花姿を見せる。葉は1枚であることが多い。阿見町では1か所のみに生息（生息地開発により移植。）

イガホオズキ　ナス科

和名は、花や実に長毛が生えるので、それを栗のイガに例えたという。普通、山地の林縁などに生える。小さな短黄白色の釣り鐘型の花を開く。実も白色。阿見町では所々で見られる。

ウツボグサ　シソ科

和名は、花穂が靫（うつぼ：矢を入れる筒型の容器）に似ているからという。夏枯れても花穂はそのまま残るので、夏枯草（カコソウ）ともいわれている。筒型の花穂に紫色の唇形花を密につける。阿見町では所々で見られる。

ノジトラノオ　サクラソウ科

花穂を虎の尾に見立てた。草姿はオカトラノオに似るが、本種はトラノオの仲間で、茎や葉に一番毛が多い。絶滅の恐れのある植物としては阿見町には比較的多い。県絶滅危惧ⅠB類　国絶滅危惧Ⅱ類

スズサイコ　ガガイモ科

花は、前夜から朝まで咲く。葉は披針形（対生）であるが、花や実はガガイモ科の特徴を示す。花は緑色で目立たないが、形は凝っている。阿見町では1か所のみに生息。県絶滅危惧Ⅱ類　国準絶滅危惧

ママコノシリヌグイ　タデ科

茎や葉に鋭いとげ、これでお尻を拭かれたら大変、葉は長三角形で、托葉稍の円腎形が特徴。阿見町では1か所のみに生息。他所でも見かけることが少なくなった。

クマツヅラ　クマツヅラ科

和名の由来はよくわからないよう。茎は四角で、対生の葉は深く切れ込む。細い茎に小さなピンクの花が咲き上がる。阿見町では1か所のみに生息。県絶滅危惧ⅠB類

ウマノスズクサ　ウマノスズクサ科

本種の実が馬につける鈴に似るという。長三角形の葉を互生につけるつる植物で、ジャコウアゲハの食草。変わった形の茶褐色の花の基部に丸い子房が見える。阿見町では所々で見られる。

トモエソウ　オトギリソウ科

和名の由来は、花弁が巴型になるので。オトギリソウ科最大花。弟を切りつけた血潮がこの種の葉に散ったという。本種は明点のみ（右上図）。阿見町では所々で見られる。県準絶滅危惧

コイケマ　ガガイモ科

イケマより小型のつる植物。山地の林縁などに多い。花柄は葉柄より短く（イケマは長い）、花びらの裂片は反り返らない（イケマは反り返る）。阿見町では1か所のみに生息。県準絶滅危惧

ツルフジバカマ　マメ科

花の色がフジバカマに似るという。よく似た仲間多いが、小葉や花の数、托葉の形も分類に重要。本種の托葉は、大きく、時に、2、3裂する。阿見町では1か所のみに生息。

ダイコンソウ　バラ科

葉がダイコンに似る。しかし、花はキジムシロなどに似ていて、バラ科に属す。山地に多いが、里にも生える。全体に柔らかな毛が多い。花後の集合果（左上）に特徴がある。阿見町では1地域のみに生息。

●田んぼ、霞ヶ浦畔、河川敷などの植物

キセワタ　シソ科

メハジキによく似た花をつける。葉はメハジキと異なり、卵形。花弁に毛が多いので綿を着せたように見えることが和名の由来とか。山地に多いが里にも生える。阿見町では1か所のみに生息。県国絶滅危惧Ⅱ類

ミクリ　ミクリ科

和名は、実がクリに似ているから。下部が雌花で先熟、上部が雄花。葉の中脈が出っ張る。ミクリの仲間のうち、ミクリは花茎の枝分かれと花柄がないので見分けられる。阿見町では少ない。県国準絶滅危惧

フトイ　カヤツリグサ科

和名は、茎が丸くて太いから。カヤツリグサ科で丸い茎は少ない。葉はほとんど見えない。茎の先から数個の短枝を出し、その先に小穂(花)をつける。阿見町ではまれに見られる。

ノハナショウブ　アヤメ科

ハナショウブの原種　大きな花弁の基部の黄色のスジと葉の中脈が目立つことが特徴。ノカンゾウ、ショウブとともに、水田周りにはどこにでもあったものが、今や、阿見町では2か所のみ、県でも準絶滅危惧に。

ノカンゾウ　ユリ科

カンゾウは中国名　ニッコウキスゲの仲間。花の色や模様は変異が多い。この仲間の花は1日でしおれ、次々と咲く。阿見町ではまれに見られる程度に減ってしまった。全国的に減少化の模様。

ミズユキノシタ　アカバナ科

ユキノシタという名がついているが、アカバナ科。茎は分枝しながら小さな広卵形の葉を互生する。花(本当はガク)は4弁で、小さく緑色で目立たない。阿見町では1か所のみに生息。県絶滅危惧Ⅱ類

クサレダマ　サクラソウ科　（右方が上）

和名は、レダマという花に似たクサということから。濃い黄色の小さい花を円錐状に多数つける。披針形の葉は対生する。阿見町では1か所のみに生息。全国的にも減少化の模様。

イヌヌマトラノオ　サクラソウ科

ヌマトラノオとオカトラノオの雑種、花はオカトラノオに似て、生息地は、ヌマトラノオと同様の地に生える。サクラソウ科の花は普通5裂するが、本種は6～7裂するものも見られる。阿見町ではまれに見られる。

ホシクサ　ホシクサ科

花を星に例えた。除草剤で激減したので、ホシクサ科の多くが県の平成24年の改訂で、絶滅危惧1Bに指定された。草丈花は小さいが、群生するとよく目立つ。阿見町では所々で見られるが、個体数は少ない。

ササバモ　ヒルムシロ科

ササの葉に似ているから。同じ科のエビモ、ガシャモクに似るが、本種は、葉柄が長いのが特徴。川の流れに群生し、涼し気。阿見町ではまれに見られる。県絶滅危惧Ⅱ類　全国的にも希少化の模様。

タコノアシ　ユキノシタ科

果実期の草姿が、まさにタコノアシのよう。花後、枝が伸び実が吸盤のように見えタコの足になる。独特の草姿で似たような仲間はない。1属1種。他の植物との競争に弱い。阿見町では少ない。県国準絶滅危惧

トチカガミ　トチカガミ科

トチはスッポンという意で、葉の表面が鏡のように光沢があるのでスッポンの鏡ということ。除草剤で激減した。阿見町では1か所のみに生息。県絶滅危惧Ⅱ類　国準絶滅危惧

●森林内や林縁の植物

イチヤクソウ　イチヤクソウ科

山地の林内に見られることが多いが、里山でも見られる。民間薬として珍重される。イチヤクのみならず、万能薬になる。林内で、葉は根生し、白色の花が数輪下向きに咲く。阿見町では少ない。

クモキリソウ　ラン科　（右方が上）

クモの子を散らしたような花姿を例え、その後、チがキに変わったという説がある。葉幅広く葉縁波打ち、唇花弁は下方に巻く。花は緑色なので、目立たない。阿見町では少ない。

オニノヤガラ　ラン科　（右方が上）

真っ直ぐ伸びた花姿を鬼の矢の柄に例えたという。本種も、腐生植物。栄養状態によるが、この頃咲くことが多い。写真は若い果実。花が白いのをシロテンマという。阿見町では1か所のみに生息。県準絶滅危惧

サガミランモドキ（サガミラン）　ラン科

マヤランの変種。サガミランと分類上の混乱があったが、同一種と考えられるようになった。腐生植物で、咲く時期は不定期。阿見町では1か所のみに生息。県情報不足　国絶滅危惧ⅠB類

コクラン　ラン科

花が暗紫色のクモキリソウの仲間。クモキリソウと同様、花の上弁側弁は管状に、唇弁は、下方に巻く。平成23年まで県危急種。指定解除されたが、阿見町では1か所のみに生息。

ヒトツバハギ　トウダイグサ科

本書で取り上げた2種の樹木のうちの1つ、雌雄異株の落葉低木。雌花（左下）も雄花（左上）も葉腋に束生する。雌木にヒメミカンソウのような果実ができる。阿見町では1か所のみに生息。県絶滅危惧ⅠA類

ヤマユリ　ユリ科

日本固有種　明治・大正時代、多量に輸出され、文明開化を支えた。園芸種の大輪のカサブランカなどの母種となった。強い芳香がある。食用としても重要。阿見町では比較的多いが、個体数は激減している。

ヤブレガサ　キク科

本種の特徴は4月の芽出し（左上）、正にヤブレガサ、成葉はヤブレガサを広げたよう。成長した株に花をつけるが、目立たない（右下）。阿見町ではまれに見られる。

ウシタキソウ　アカバナ科

大阪の牛滝山で見つかったので、ウシタキソウ。ミズタマソウの仲間。少しいびつな水玉のような実ができる。葉は卵形で基部は心形。筑波山でも見られる。阿見町では少ない。県絶滅危惧Ⅱ類

ホドイモ　マメ科

和名や上図の花を見ても、とてもマメ科とは思えないが、豆ができる(写真は撮れなかった)。塊根ができ、食べられる。同属のアメリカホドイモはアピオスと言って、健康食品になっている。阿見町では少ない。

ニガクサ　シソ科

和名の由来は不明で、苦くない。次のツルニガクサと同じく、普通のシソ科の花と形状が異なる。上唇が小さく、下唇が著しく大きく、雄しべと雌しべが上唇より大きく突き出ている。阿見町ではまれに見られる。

ツルニガクサ　シソ科

ツルの意味も不明の様。ニガクサとの違いは写真ではよくわからないが、ニガクサは全体に腺毛(液を分泌する毛)があり、ニガクサには腺毛はない。特に、ガクを見るとよくわかる。阿見町では所々で見られる。

秋の花　●草原、畑地、林縁、路辺などの植物

キツネノカミソリ　ヒガンバナ科

葉の形をカミソリに例えた。早春に葉が出て、花時にはなくなる。6つの黄赤色の花弁(花被片)はヒガンバナより幅広く、余り、反り返らない。阿見町では所々で見られる。

ノアズキ　マメ科

典型的な豆の花と異なり、後から 下弁(竜骨弁)が立ち、上弁(旗弁)が大きく横に寝る。アズキの花も同色同様。葉の下部が幅広い。阿見町では所々で見られる。県準絶滅危惧

コシオガマ　ゴマノハグサ科

和名は、シオガマギクに似て花が小さいからという。半寄生植物　全体に腺毛が密生し、ベタつく。花の下唇に2つのふくらみがあり、白い毛が生える。阿見町では所々で見られる。

オガルカヤ　イネ科

イネ科植物のうち、希少で分かり易い3種をあげた。カルカヤ(刈萱)は屋根の材料などに使われた。本種はそのうちのオガルカヤ、異形な小穂と黒紫色の雌雄のしべが目立つ。阿見町では1か所のみに生息。

メガルカヤ　イネ科

もう1つのカルカヤ、花姿がオガルカヤよりやさしい。赤褐色の長いノギ(棘状の突起)が目立ち、葉の基部から葉鞘にかけて長い毛がある(右下)。阿見町では1か所のみに生息。

オミナエシ　オミナエシ科

秋の七草の一種　庭などに植えられることは多いが、自然界では減った。花持ちはよいが、晩期は臭くなる。仲間のオトコエシより毛は少ない。葉は対生 阿見町では1か所のみに生息。県絶滅危惧Ⅱ類

ヒキヨモギ　ゴマノハグサ科

半寄生植物　ヨモギから栄養を取ることが多いので、和名は、ヨモギから栄養を引くということか。葉も、やや、ヨモギに似る。花は毛が多い。阿見町ではまれに見られる。

マヤラン　ラン科

神戸の麻耶山で発見された。山地性の腐生ランで、開花時期は不定期。花は、全体に白色で、花弁の内側の一部が紅紫色。阿見町ではまれに見られる。県国絶滅危惧Ⅱ類

キバナアキギリ　シソ科

和名は、秋にキリに似た黄色の花をつけるからという。サルビアの仲間で、葉も花の形も似る。山地の林縁などに生え、筑波山でも多く見られる。阿見町では1地域のみに生息。

カラスノゴマ　シナノキ科

黒い小さな実をゴマに見立て、食べられないのでカラスノゴマとしたという。長く見えるのは仮雄しべで、本物は短い。シナノキ科の葉は左右非対称で、本種も、やや、非対称。阿見町ではまれに見られる。

マキエハギ　マメ科

もう1つの樹木、小さなハギの仲間。和名は、細い花柄が蒔絵の手法を思わせるからという。阿見町ではまれに見られる。県絶滅危惧Ⅱ類

ツクバトリカブト　キンポウゲ科

ヤマトリカブトの亜種、筑波山で発見された。葉の切れ込みが深い。トリカブトとは、貴族の烏帽子のことだが、他説もある。全草毒で、特に根に強い。日本三大毒草の1つ　阿見町では所々で見られる。

センブリ　リンドウ科

千回振り出しても苦いという昔懐かしいセンブリ、健胃薬として、苦いのを我慢して、広く飲まれた。花は白っぽく小さい。これも昔はどこにでもあったものが、今では、阿見町では1か所のみに生息

ハバヤマボクチ　キク科

ハバヤマとは草刈場のこと、ボクチとは、ほくちで、火打石の火花を移し取るもの。葉裏の毛をほくちに供した。アザミの花を大きくして少し黒っぽくした花をつける。大型の草　阿見町では少ない。県絶滅危惧Ⅱ類

オケラ　キク科

語源は不明。山でうまいはオケラにトトキと言われるオケラ。根はお正月の屠蘇の材料にも使われる。つぼみが魚骨状の独特の形で、7月頃につく。両性花株と雌花株がある。阿見町ではまれに見られる。

アワコガネギク（キクタニギク）　キク科

和名は、黄色に輝く多数の小さな花がにぎやかに咲き競う様から。別名は地名から。葉はヨモギに似るが、裏が余り白くない。これも広く大幅に減少しており、阿見町でもまれに見られるほど。県国準絶滅危惧

●田んぼ、霞ヶ浦畔、河川敷などの植物

ミズアオイ　ミズアオイ科

葉の形がカンアオイの仲間に似る。花はホテイアオイに似るが、花色は濃い。頑固な水田雑草のコナギもこの仲間。阿見町ではまれに見られる。県国準絶滅危惧

ニッポンイヌノヒゲ　ホシクサ科

総苞片が長くピンと張り、りっぱなイヌノヒゲのよう。日本に広く分布するというが、阿見町では1か所のみに生息。県準絶滅危惧

サワヒヨドリ　キク科

ヒヨドリの鳴く頃、沢に咲く花ということ。花も茎も赤っぽく、葉はほとんど葉柄がなく、単葉あるいは3深裂する。フジバカマと同様、クマリンの香りがする。山の湿地に咲く花で、阿見町ではまれに見られる。

タカアザミ　キク科

北方系のアザミで、茎は角ばり、花は総状に、長い柄の先にぶら下がって下向きにつく。総苞片はあまり広がらず、頭状花とあわせて、小さなひょうたんのように見える。阿見町では少ない。

ツリフネソウ　ツリフネソウ科

名の通りの草姿。ホウセンカ、インパチェンスの仲間で、実は弾ける。この仲間に花が黄色く同じような花姿のキツリフネという植物もある。山の湿地に多く、阿見町では1か所のみに生息。

ヌマガヤ　イネ科

イネ科もう1つ。低湿地から高山まで、広く分布する。葉の表面は粉白色をおび、中脈は隆起する(右下)。葉耳(葉の生え際)に毛があり(左下)、小花にノギはない。阿見町では1か所のみに生息。

ヒメシロネ　シソ科　(右方が上)

和名は、根の白いシロネに似て、小さいからという。葉は対生で、葉柄はほとんどない。数個の白い小さな花が葉腋につく。シロネの仲間の中で、生息数は一番少ない。阿見町でもまれに見られる程度。

ナガボノアカワレモコウ　バラ科

ワレモコウより小葉も花の穂も長い。ナガボノシロワレモコウに対してアカ、ナガボノシロワレモコウより花期早い。阿見町では1か所のみに生息(生育不良により移植)県絶滅危惧ⅠB類

ミズオトギリ　オトギリソウ科

オトギリソウの仲間にしては珍しいピンク色の花で、開花時期も遅い。葉に明点(右上)がある。オトギリソウの仲間には、黒点のあるもの両方あるものもある。県準絶滅危惧

ナガボノシロワレモコウ　バラ科

花の時期はナガボノアカワレモコウより1ヶ月ほど遅い。花色は、普通白い(左上)が、アカっぽくなるものもある(右上)。花は穂の先から咲き出す有限花序。阿見町ではまれに見られる。県絶滅危惧Ⅱ類

ハッカ　シソ科

ジャパニーズミント、メントールを多く含み、全草の香りが良い。対生の葉の葉腋に小さな薄紫の花をつける。花の香りもある。阿見町では所々で見られる。

シソクサ　ゴマノハグサ科

葉にシソの香りがある。茎は地を這い、小さな白色の花をつける。上唇弁に毛がある。阿見町ではまれに見られる。全国的にも希少化の模様。

●森林内や林縁の植物

ヤマラッキョウ　ユリ科

ネギ属。ニラの花を少し大きくして色をピンクにした感じ。農作物のラッキョウにもよく似る。葉の断面は三角状。茎頂に右上のような多数の小さな花をつける。阿見町ではまれに見られる。県準絶滅危惧

ヤマジノホトトギス　ユリ科

和名は、山道沿いに見られ、花の斑点が鳥のホトトギスの胸の斑点に似ているからという。茎に斜め下向きの毛が密生する。雄しべの花糸は白色で、葯は花糸の向きと同じ方向につく。阿見町では、林内林縁などの所々で見られる。

シダ植物　●草原、畑地、林縁、路辺などの植物

ホトトギス　ユリ科

茎に斜め上向きの毛が密生。雄しべの葯は花糸の向きに直角。タイワンホトトギスの葯は同方向。花色、花期も異なる。園芸種は中間型。阿見町では1か所のみに生息（開発地からの移植）県絶滅危惧ⅠB類

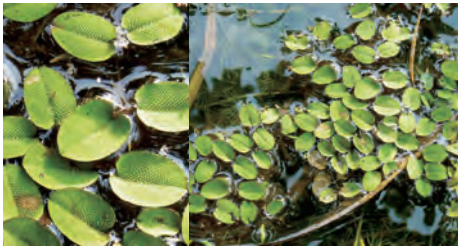
コヒロハハナヤスリ　ハナヤスリ科

シダ植物は、胞子で殖える。葉柄のはっきりした小型のハナヤスリ。真ん中の茎は未成熟の胞子葉。4月から霜が降りる頃までかわるがわる胞子葉を出す。阿見町ではまれに見られる。県絶滅危惧Ⅱ類

ウラジロ　ウラジロ科

和名通り、葉裏が白い大型のシダ。どんどん殖えるので、白髪になるまでと、葉を裏にして子孫繁栄を願って、正月飾りにした。胞子は葉裏にできる。暖地の山辺に生える。阿見町では1か所のみに生息。

●田んぼ、霞ヶ浦畔、河川敷などの植物



サンショウモ　サンショウモ科

栄養葉はサンショウの葉の形で、とてもシダには見えない。葉の表面をよく見ると、小さな突起が多数ある(左上)。水中に胞子嚢がある。阿見町では1か所のみに生息。県絶滅危惧ⅠB類　国絶滅危惧Ⅱ類

ミズニラ　ミズニラ科科

一見単子葉植物に見えるが、これもシダ。夏に根元に胞子嚢ができる(右下)。田んぼの除草剤で大幅に減少した。阿見町では少ない。県国準絶滅危惧

●森林内や林縁の植物

コモチシダ　シシガシラ科

夏季に不定芽が出ることがある(右上)のでコモチシダ。海岸から山麓の林縁に生える大型のシダで葉の表面に光沢がある。(右下)は葉裏の胞子嚢群　阿見町では1か所のみに生息。

イワヘゴ　オシダ科

葉軸に黒い鱗片が密生する大型のシダ。左下は冬越の残葉で、鱗片は落ちてしまった。芽は鱗片で覆われている。山地の林床や林縁に生える。阿見町では1か所のみに生息。県絶滅危惧Ⅱ類

オオハナワラビ　ハナヤスリ科

胞子葉が花のよう見える。ハナワラビの中では大型。小葉の切れ込みが細かく多い。明るい林床に生える。阿見町では所々で見られる。

5. 動物たち

― 図鑑担当：山田　晃太郎 ―

田んぼや森、草地などの多様な自然が広がる阿見町には、色々な動物がくらしています。両生類と、は虫類のカメの仲間は、繁殖と生息に水辺が必要で、主に田んぼの周りに多くの種類がいます。は虫類は動物食が強く、特にヘビはカエルやネズミを好んで食べることが多いことから、田んぼなどの水辺や人家、森などで見られます。大型のほ乳類は阿見町には生息していませんが、ノウサギやネズミなど、小型のほ乳類が農耕地の周りで見られます。

阿見町にいる両生類やは虫類、ほ乳類の多くは、人が農業を中心とした暮らしをすることで、その生息環境が作られてきました。人と一緒に生きてきた種類が多いのが特徴です。しかし、人の暮らしが農業から離れた現在、数を減らして、絶滅危惧種に指定されているものもいます。生息地の中心だった谷津田は、耕作放棄されたり、開発されたりすることで水辺の環境が悪化し、特にカエルは影響を強く受けています。

身近にある谷津田を中心とした自然環境を見つめ直し、ぜひ田んぼへ生き物観察に出かけてみて下さい。

耕作放棄された谷津田（左）と開発により埋め立てられた谷津田（右）

カエル

ニホンアカガエル

阿見町の谷津田を代表するカエル。体長6cmほどです。2月頃、春を知らせる暖かい雨が降ると、冬眠を中断して夜に産卵します。
産卵のために、数百匹が集まることがあり、「キャキャ…」という鳴き声が真っ暗な谷津田に響き渡ります。

トウキョウダルマガエル

関東で「トノサマガエル」と呼ばれるカエル。体長6cmほどです。田んぼやため池で一生を過ごし、あぜを歩くと、田んぼに次々と飛び込んで水面から顔を出す姿をよく見かけます。

シュレーゲルアオガエル

体長4cmほどの全身が緑色のカエル。山地にいる「モリアオガエル」の姉妹種。阿見町では5～6月頃が繁殖の最盛期で、この時期は「コロロ…」という鳴き声がよく聞こえます。

アズマヒキガエル

体長15cmほどになる大型のカエルです。夏の夜には、住宅街の庭先や車道を歩く姿もよく見かけます。
筑波山の「ガマの油売り」の題材になっていることで有名です。産卵期には小さな水辺に多数のヒキガエルが集まり、オスがメスを取り合う「ガマ合戦」を繰り広げます。

カメ

ニホンイシガメ

最大で20cmほどになる日本固有のカメ。ため池やその下流にある水路など、やや流れのある水辺を好みます。阿見町ではクサガメより数が少なく、なかなか見られません。

クサガメ

捕まえるとくさいにおいを出すところから名前が付きました。ため池やその下流にある田んぼなど、流れの緩やかな水辺にいます。
甲羅に3本の筋状の隆起があるのが特徴で、大きくなると30cmほどになります。雑食で、ザリガニを食べることもあります。

ヘビ

ヒバカリ

全長40～60cmほどの小型のおとなしい無毒のヘビ。首に白い筋が入っているのが特徴です。森や田んぼ、草地などさまざまな自然環境が入りくんだ場所に多く、阿見町では谷津田で見られます。

アオダイショウ

大きくなると200cmほどになる大型のヘビです。人家やその周りをすみかにすることが多く、田んぼを泳ぐように渡ることもあります。人間にとって最も馴染み深いヘビの1つです。

ジムグリ

全長70～100cmほどのおとなしいヘビで、体は赤みがかった茶色をしています。林の中など涼しい環境を好み、朝や夕方など気温の低い時間帯に見かけることがあります。

トカゲ

ヒガシニホントカゲ

草地や植えこみ、林の縁などにいるトカゲの仲間。日光浴をしている姿を見かけます。主に昆虫やミミズなどを食べる動物食です。子どもの個体は、尾が鮮やかな青色をしているのが特徴。ニホンカナヘビに比べ、数は少ないです。

ニホンカナヘビ

最大で全長25cmほど。草地や植えこみなどで日なたぼっこしている姿をよく見かけます。動きが素早いため、なかなか捕まえられません。
捕まりそうになると、自ら尾を切り落として、切れた尾が動いている間に逃げ出します。尾はしばらくすると再生します。

ニホンヤモリ

全長10～14cm。人家やその周辺にすみ、害虫を捕食することから「家守（ヤモリ）」と呼ばれるようになったと言われています。夜行性で、昼間は壁の隙間などに隠れています。
足の裏が特殊な構造をしていて、垂直な壁を自在に動くことができます。

哺乳類

カヤネズミ

体重が10ｇほどの小さなネズミ。ススキのような背が高いイネ科の植物の葉を裂いて編むことで、10cmほどの球状の巣を作り、この中で子育てをします。

ジネズミ

名前はネズミですがモグラの仲間です。モグラのように地中生活はせずに、畑の周りの茂みなど、地上をすみかにしています。
とがった鼻が特徴的で、顔つきもネズミとは全く違っています。見かけることが少ない動物です。

ニホンイタチ

タヌキと並んで古くから身近なほ乳類の1つです。主に水辺の近くで暮らし、カエルなど動物を好んで食べます。夜間、車を走らせていると、道路を横切る姿を時折見かけます。
日本固有のニホンイタチの他に、西日本には外来種のチョウセンイタチがいます。

ハクビシン

阿見町の主要な農作物の害獣の1つです。主に畑作物や果樹を食害し、深刻な被害になることもあります。体長と同じくらいある長い尾と、顔の鼻筋に入る白い模様が特徴です。市街地でも、夜間歩いている姿をよく見かけます。猫と見間違えることも多いです。

6．希少生物・外来生物について考える

私たちが生きていくためには、生物多様性、絶滅のおそれのある生物との共生も大きな課題です。私たちの調べたところでは、阿見町で絶滅のおそれのあるものとしては、植物79種（全体の6.7%）、鳥30種（18.2%）、昆虫９種（1.7%）（2019年10月現在）でした。この中には、昔は、阿見町のどこにでもいたものが、生活様式が変化するにつれ、今や、絶滅危惧種になってしまったものも多くあります。

貴重な生物・珍しい生物・絶滅のおそれのある生物は、なぜ、大事なのでしょうか。地球は人間のためにだけあるのではありません。人間も含めて、動物は植物なしでは生きていけません。植物も動物なしでは生きていくのが困難です。お互い、関係して、共生して、助け合って生きているのです。私たちは、利便性の追求だけではなく、生物といかにうまく付き合っていけるのか、茨城県でも平成26年、生物多様性地域戦略を策定しました。次は、阿見町の番だと思います。

また、外来生物の侵入、増加が顕著になって、問題も発生しています。

外来生物が侵入し、その分布を広げてくると、在来種の生息・生育阻害、交雑の可能性や、人間や農林水産業に被害を及ぼすなど、様々な被害を及ぼす恐れがあります。国では、自然環境や人間生活に被害を及ぼす恐れの高い外来生物を「生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来生物」としてリストアップし、被害の低減に努めています。被害の恐れの高いものを「特定外来生物」に指定し、飼育・栽培・保管・移動を原則禁止にしました。

阿見町で確認されている特定外来生物は、ソウシチョウ、アカボシゴマダラの鳥や昆虫、アレチウリ、オオキンケイギク、オオフサモ、ナガエツルノゲイトウ、アゾラ・クリスタータ（アカウキクサ科）の植物などで、そのほかにも３種の鳥、９種の昆虫、287種の植物が外来種として確認されています。植物の24.9%が外来種で占められており、絶滅のおそれのある植物の保護とともに、外来種の動向にも目を向けていく必要があります。一時期、日本中を席巻するかのごとく恐れられたセイタカアワダチソウやセイヨウタンポポなども、その勢いは一応の落ち着きを見せてきています。しかし、セイヨウタンポポは、在来のカントウタンポポと交雑することも多いので、今後も注視と対策が必要です。

最後に、林内の薄暗がりの中に咲く艶やかなキンラン（県準絶滅危惧 国絶滅危惧Ⅱ類）を載せておきます。このキンランがいつまでもどこにでも咲いている阿見町でありますよう願っています。

（稲川　雅信）

第Ⅱ部 図鑑に掲載した「生きもの」の索引

野鳥たち

アオサギ 60
アオジ 51
アカゲラ 54
アカハラ 53
アマサギ 60
イソシギ 58
ウグイス 47
ウソ 52
エナガ 50
オオタカ 65
オオハクチョウ 62
オオバン 61
オオヨシキリ 56
オオルリ 55
オカヨシガモ 63
オナガガモ 63
カイツブリ 62
カシラダカ 52
カルガモ 63
カワウ 61
カワセミ 57
カワラヒワ 50
カンムリカイツブリ 62
キジ 47
キジバト 49
キセキレイ 56
キビタキ 55
キンクロハジロ 64
ケリ 57
ゴイサギ 60
コガモ 64
コゲラ 51
コサギ 60
コジュケイ 54
コチドリ 58
コハクチョウ 62
サシバ 65
サンコウチョウ 55
シジュウカラ 49
シメ 52
ジョウビタキ 50
シロハラ 53
スズメ 48
セイタカシギ 58
セグロセキレイ 56
セッカ 57
センダイムシクイ 51
ソウシチョウ 55
ダイサギ 59
タゲリ 57
タシギ 59
タマシギ 59
チュウサギ 59
チョウゲンボウ 66
鳥類目録 68,69
ツグミ 53
ツバメ 48
トビ 65
トモエガモ 64
ノスリ 65
ハクセキレイ 56
ハシビロガモ 63
ハシブトガラス 48
ハシボソガラス 48
ハヤブサ 66
バン 61
ヒドリガモ 63
ヒバリ 47
ヒヨドリ 49
フクロウ 66
ベニマシコ 52
ホオジロ 51
ホシハジロ 64

ホトトギス 53
マガモ 63
ミコアイサ 64
ミサゴ 66
ムクドリ 48
ムナグロ 58
メジロ 50
モズ 54
ヤマガラ 49
ユリカモメ 61
ヨシガモ 64
ルリビタキ 54

魚たち

ウキゴリ 75
ウグイ 75
ギンブナ 71
コイ 71
ザリガニ 75
シラウオ 70,73
スジエビ 76
スズキ 73
タイリクバラタナゴ 73
タウナギ 74
タモロコ 74
ツチフキ 72
ドジョウ 77
ドブガイ 76
ニゴイ 72
ハクレン 72
ブラックバス 71
ブルーギル 74
ホトケドジョウ 77
ボラ 71
マシジミ 76
マハゼ 72
マルタニシ 77
ミナミヌマエビ 75
メダカ 77
ヨコエビ 76
ライギョ 73
ワカサギ 70,74

虫たち

アオモンイトトンボ 81
アカガネサルハムシ 83
アカスジキンカメムシ 85
アキアカネ 81
アブラゼミ 86
アリグモ 89
イタドリハムシ 83
イボタガ 80
ウラナミアカシジミ 80
エサキモンキツノカメムシ 85
エンマコオロギ 88
オオアオゾウムシ 84
オオシオカラトンボ 81
オオハナアブ 87
オオヒラタシデムシ 83
オジロアシナガゾウムシ 84
オニヤンマ 81
オンブバッタ 88
カノコガ 80
カブトムシ 83
キアゲハ 79
キクヅキコモリグモ 89
キゴシハナアブ 87
キボシカミキリ 84
クマバチ 88
クロウリハムシ 83
コアオハナムグリ 82
コガネグモ 89
コバネイナゴ 88
ジャノメチョウ 79
ジョロウグモ 89
シロオビトリノフンダマシ 89
ジンガサハムシ 83
ダイミョウセセリ 80

チョウトンボ 81
ツマグロオオヨコバイ 86
ツマグロキンバエ 87
ツマグロヒョウモン 79
トゲヒシバッタ 88
トホシテントウ 82
トラマルハナバチ 88
ナガサキアゲハ 79
ナガメ 85
ナミテントウ 82
ナミハナアブ 87
ニイニイゼミ 86
ニホントビナナフシ 86
ノシメトンボ 81
ブチヒゲカメムシ 85
ベニカミキリ 84
ベニシジミ 79
ホオズキカメムシ 85
マダラガガンボ 87
マメコガネ 82
マメハンミョウ 82
ムネアカアワフキ 86
モモブトスカシバ 80
ヤマトシリアゲ 86
ヤマトタマムシ 82
ユウマダラエダジャク 80
ヨコジマオオハリバエ 87
ヨコヅナサシガメ 85
ヨツスジハナカミキリ 84
ラミーカミキリ 84
ルリタテハ 79
ワキグロサツマノミダマシ 89

植物たち

アオイスミレ 91
アサマスゲ 92
アマナ 91
アリアケスミレ 92
アワコガネギク 90,104
イガホオズキ 95
イチヤクソウ 99
イチリンソウ 93
イヌヌマトラノオ 98
イワヘゴ 107
ウシタキソウ 101
ウツボグサ 96
ウマノスズクサ 96
ウラジロ 107
エビネ 95
オオハナワラビ 107
オガルカヤ 102
オケラ 104
オニノヤガラ 100
オミナエシ 102
カキツバタ 92
カラスノゴマ 103
カワヂシャ 93
カントウタンポポ 91
キジムシロ 90
キセワタ 97
キツネノカミソリ 101
キバナアキギリ 103
キンラン 94
ギンラン 94
ギンリョウソウ 95
クサスギカズラ 92
クサレダマ 98
クマガイソウ 95
クマツヅラ 96
クモキリソウ 99
コイケマ 97
コクラン 100
コシオガマ 102
コヒロハハナヤスリ 106
コモチシダ 107
サイハイラン 95
サガミランモドキ 100
ササバギンラン 94

ササバモ 99
サワヒヨドリ 104
サンショウモ 107
シソクサ 106
シュンラン 93
ジョウロウスゲ 93
スズサイコ 96
センダイタイゲキ 94
センブリ 103
ダイコンソウ 97
タカアザミ 104
タコノアシ 99
タニギキョウ 94
ツクバトリカブト 103
ツリフネソウ 105
ツルニガクサ 101
ツルフジバカマ 97
トチカガミ 99
トモエソウ 97
ナガボノアカワレモコウ 105
ナガボノシロワレモコウ 105
ニガクサ 101
ニッポンイヌノヒゲ 104
ニリンソウ 93
ヌマガヤ 105
ノアズキ 101
ノウルシ 92
ノカンゾウ 98
ノジトラノオ 96
ノニガナ 91
ノハナショウブ 98
ハッカ 106
ハバヤマボクチ 103
ヒキヨモギ 102
ヒトツバハギ 100
ヒトリシズカ 94
ヒメイズイ 91
ヒメシロネ 105
フトイ 98
ホシクサ 99
ホドイモ 101
ホトトギス 106
マキエハギ 103
ママコノシリヌグイ 96
マヤラン 102
ミクリ 97
ミズアオイ 104
ミズオトギリ 105
ミズニラ 107
ミズユキノシタ 98
ミヤコグサ 91
メガルカヤ 102
ヤナギノトラオ 92
ヤブレガサ 100
ヤマザクラ 90
ヤマジノホトトギス 106
ヤマユリ 100
ヤマラッキョウ 106
レンプクソウ 93
ワニグチソウ 95

動物たち

アオダイショウ 110
アズマヒキガエル 109
カヤネズミ 112
クサガメ 110
ジネズミ 112
ジムグリ 111
シュレーゲルアオガエル 109
トウキョウダルマガエル 109
ニホンアカガエル 109
ニホンイシガメ 110
ニホンイタチ 112
ニホンカナヘビ 111
ニホンヤモリ 111
ハクビシン 112
ヒガシニホントカゲ 111
ヒバカリ 110

参考文献

（第Ⅱ部図鑑ガイド「鳥たち」「虫たち」「植物たち」の参考文献です）

・髙野伸二『フィールドガイド　日本の野鳥』（増補改訂）2015年、日本の野鳥の会

・真木広造・大西敏一・五百澤日丸『日本の野鳥650』2014年、平凡社

・大橋弘一『日本野鳥歳時記』2015年、ナツメ社

・築地琢朗『昆虫観察図鑑』2011年、誠文堂新光社

・槐真史『ポケット図鑑　日本の昆虫1400』2013年、文一総合出版

・黒沢良彦・渡辺泰明『甲虫』1996年、山と渓谷社

・石井誠『公園で探せる昆虫図鑑』2011年、誠文堂新光社

・佐竹義輔・大井次三郎・北村四郎・亘理俊治・富成忠夫『日本の野生植物　草本Ⅰ Ⅱ Ⅲ』1982年、平凡社

・村田威夫・谷城勝弘『野外観察ハンドブック　シダ植物』2007年、全国農村教育協会

・門田裕一・畦上能力『山渓ハンディ図鑑１　野に咲く花』2013年、山と渓谷社

・門田裕一・畦上能力『山渓ハンディ図鑑２　山に咲く花』2013年、山と渓谷社

・茨城県『茨城における絶滅のおそれのある野生生物（植物編）』2012年

・環境省『第４次レッドリスト　植物Ⅰ（維管束植物）』2012年

・阿見町環境保全基本調査委員会『阿見町環境保全基本調査報告書』2015年

・阿見町環境保全基本調査委員会『阿見町環境保全基本調査報告書追録』2015年

執筆者（50音順）

・青　木　成　夫　（阿見町小池城址公園里山の会）
・稲　川　雅　信　（阿見野草の会）
・大　﨑　治　美　（元阿見町教育長）
・大　森　はるみ　（阿見野草の会）
・荻　嶋　光　明　（神田池を保全する会）
・栗　原　友　香　（親子自然体験クラブ　森のきのこ）
・久留島　昭　彦　（阿見野鳥クラブ）
・小松﨑　将　一　（茨城大学教授）
・佐　藤　征　男　（阿見里山ワンダーランドの会）
・中　島　紀　一　（茨城大学名誉教授・うら谷津再生の会）
・村　木　貞　之　（レイクサイドタウン区長）
・山　﨑　政　雄　（霞ヶ浦漁業協同組合阿見町支部）
・山　田　晃太郎　（うら谷津再生の会）
・吉　田　幸　二　（水辺基盤協会）

執筆協力者（50音順）

・春　日　清　一　（元国立環境研究所総合研究官）
・松　田　浩　二　（筑波山ネイチャーガイド）

編集

・阿見町環境審議会
・阿見町町民生活部生活環境課

あとがき

平成22年、町では、10年間の環境の保全及び創造に関する施策の総合的かつ計画的な推進を図るために、基本となる「阿見町（第１次）環境基本計画」を策定しました。平成23年に、「阿見町（第１次）環境基本計画」の具体的施策体系の一翼を担う「環境保全基本調査」に着手及び完了したものの、東日本大震災の影響により、施策を推進していくことが困難な時期もありました。しかし、平成29年に、音声入り画像データを駆使してのシンポジウムを開催するに至りました。ただ、シンポジウムでは、本町における景観の象徴である霞ヶ浦について、さほど言及されませんでした。そこで、本書は、霞ヶ浦に関連する事柄を積極的に盛り込んでいく方針のもと、「阿見町（第１次）環境基本計画」の最終成果品として刊行する運びとなりました。

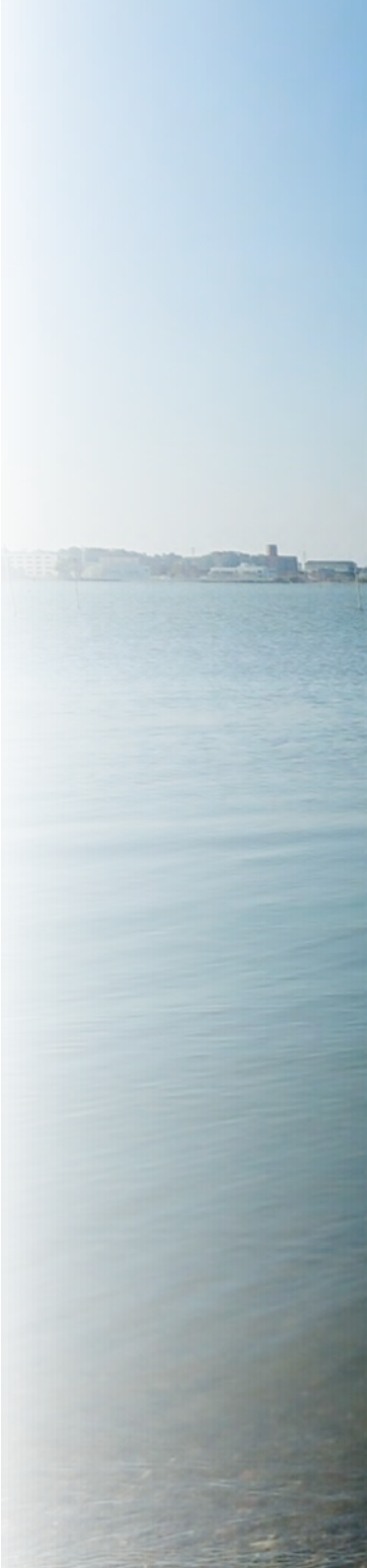
なお、本書は、児童から大人まで、気軽に阿見町の自然に興味を持っていただけることを意図して執筆・編集しました。まずは、「自然環境」、「環境保全」等に関心を持っていただき、「地球温暖化」、「生物多様性」、「気候変動」、「プラスチックゴミ」等の問題にまで意識を向けていただければと思います。

次に、執筆・編集に携わっていただいた方々におかれましては、阿見町の自然について精通され、長年にわたる貴重な経験や情報を、刊行にむけて、惜しみもなくご提供賜り、深く感謝を申し上げます。

また、私からは、タイトル「阿見町の自然ガイド　2020　～身近な自然の生きものたち～」の「2020」というキーワードについて、触れることにします。折しも、この年の３月、この頁を作り上げるため、時おり頭を抱えながらキーボードをたたいているところです。世界の情勢は、中国から起こった、新型コロナウイルス感染症が拡散したことにより、社会的、経済的に多大な影響を受けております。国内に目を向けると、国を挙げての最大のスポーツ祭典である東京オリンピックも延期になりそうです。

さらに、本書の刊行の目的は前述のとおりですが、他、私的に、いささか壮大な話になりますが、本書が好評により、回数を重ね増刷され、50年先、100年先、さらにそれよりも未来の人々が、ここに掲載されている「場所」や「生物」について現在と過去を比較して、それぞれ思いを巡らしながら本書を読んでいただければと切に願います。

最後に、印刷・製本作業において、急な問合せや打合せにも丁寧に対応してくださった、株式会社　横山印刷に感謝申し上げます。



阿見町の自然ガイド　2020

～身近な自然の生きものたち～

発行日　令和２年３月20日
編　集　阿見町環境審議会
発　行　阿見町町民生活部生活環境課
〒300-0392
茨城県稲敷郡阿見町中央一丁目１番１号
TEL　029-888-1111
E-mail　seikatsukankyoka-ofc@town.ami.lg.jp
印刷所　株式会社　横山印刷